Fate stay night [Delusion version]

抜殻

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２００４年　冬木

第５次聖杯戦争。これは、その可能性の欠片。本流に選ばれる事はなく、剪定され誰にも記憶される事がなかった戦い。だが、そこには信念が、欲望が、祈りがあった。血を流し、戦ってでも得たかった願いが。これは、誰も知らない聖杯戦争の物語。

護ると決めた――――――それが彼女の誓い

目次

プロローグ 1
召喚：アーチャー 4
1日前 9
歪み始める日常 14
戦いの始まり 18
初戦 23
再戦 27
運命の夜 33
セイバー召喚 40
名乗り 44
束の間の一息 50
戦う決意 55
狂戦士の宴 61
致命的な隙 68
協力関係 74
戦いの指標 80
略奪の合図 86
燃え尽きた友情 90
炎の試練 94
思わぬ再開 101
断章　毒虫の根城 107
目覚め・遠坂との朝 111

プロローグ

死の一撃が、迫る。衛宮士郎が、これまで培ってきたもの全てを砕く力。圧倒的な力の前に、衛宮士郎は何も出来なかった。

（俺は、ここで死ぬ。間違いなく。）

衛宮士郎は、生きる事を諦める。もはや脳裏には、走馬灯の様に過去の記憶が流れている。あの、衛宮士郎が全てを失い、一度死んだ業火の夜。・・・ 切嗣との出会い。そして、約束。その記憶が、衛宮士郎に再び生きる気力を与えた。

（死ぬだと!?ふざけるな！こんな訳も分からずに？俺は！まだ！）

「切嗣との約束が、残っている！護ると！決めたんだ！」

最後までの抵抗は、全くの無意味であった。衛宮士郎がいくら吠えても、状況は変わらない。打ち込まれた拳は、容易く衛宮士郎の心臓を穿ち、命を奪うだろう。だが、その抵抗が、激情が、体内の魔力を燃やし奇跡を起こした。

突如光に包まれる土蔵。そして、

「ぬっ！」

衛宮士郎を襲っていた赤き刺客が、蔵の外へと飛び出る。そして入れ替わる様に、1

人の女性が衛宮士郎の前に立っていた。月光が差し込み、褐色の肌に白い髪を照らし出す。そして、強く、決して折れない芯を持つ声が、衛宮士郎に問いかける。

「問おう。貴方が、私のマスターか？」

月下の邂逅。衛宮士郎には、まるで飲み込めない状況だが、見惚れていた。彼女の目に宿る、逆境をも弾く強い意志に。そして誰かも分からない自分を助けてくれた事に。

「‥‥これより我が誉れは、祖国と、貴方を護る事にある。ここに、契約は完了した、我がマスター」

彼女の僅かな微笑みは、今まで見た誰よりも、優しさに満ちていた。

×

召喚の、呪文を紡ぐ。失敗は許されない。自身の魔力の波長が最も良くなる午前2時に合わせて、召喚を行う。触媒は用意出来なかったが、私の魔力量なら問題無いだろう。必ずセイバーを召喚してみせる。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

――――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに

従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

（来た！最高の召喚！これは手応えがあった。間違いなくセイバーを引いたはず。）

最高の状態で、最高の召喚が出来たマスター、遠坂凛。魔力の流れによって、一時的に視力を閉じていた彼女が、最初に見た人物は・・・

「あぁ!?てめえが、俺のマスターかぁ!?」

ヤンキーの様な口調で喋る、長身半裸の男だった。

召喚：アーチャー

「あぁ!?テメェが、俺のマスターか?」

遠坂凛によって召喚されたサーヴァントは、屋敷中に響きそうなほど大きい声で訊ねる。第一印象は、「赤い」だった。服装も髪色も雰囲気でさえも、まるで炎の様に赤かった。長身で、がっしりとした肉体。半裸の姿は鍛えられた肉体を露わにしている。凛はその目のやり場の無さと、耳を塞ぎたくなる程の大きい挨拶に、自身の感覚が戻った事を後悔する程だった。だが自らが召喚したサーヴァント。これから共に戦う相棒について、知らなければならない。

「そ、そうだけどあんた、何か態度とか声とか、大きくない?貴方は私の…」

「おぉ!悪かったな!それにしても、此処は何処だ?やけに陰気臭え場所だな、おい!」

(こいつ…　人の話全然聞かないし…)

自らの僕(しもべ)に早くも不満タラタラな凛。頬を膨らませ、ジトッとサーヴァントを見ていると、ある事に気がついた。

「あれ?貴方、クラスは?」

そう、サーヴァントは剣を持っていなかったのである。代わりに持っているのはとて

も大きな戦輪（チャクラム）だった。
「あ？クラス？今回の俺ぁアーチャーで現界してるみてぇだな」
「そう…」
凛は、暗い声で小さく呟く。自身にとって、最高の召喚。それでも、狙いのクラスを召喚する事は出来なかった。
「んだよ、セイバーじゃなきゃ不満か？それとも、目当ての奴でも居たのか？」
「ううん、そういう訳じゃないわ。ただ、他人の手にセイバーが渡ると面倒ってだけ」
「あー、なるほどな。確かに、面倒な奴を仲間にできりゃそれだけ戦いはやり易いもんな」
「でも、別に後悔とかはないわ。私の全力で召喚したんだもの。それよりも、今後貴方とどうやって戦って行くかの方が大事よ」
「さっぱりした女だな。まっ、その方が俺もやり易い。これから宜しく頼むぜ、マスター」
スッと、手を伸ばすアーチャー。凛も手を伸ばし、握手を交わす。
「私、遠坂凛よ。凛でいいわ。よろしくね、アーチャー。それで、貴方の真名を教えて欲しいんだけど…」
「おぉ、まだ名乗ってなかったか。俺の名は＿＿＿＿＿＿」

×

「うっそ！貴方、とんでもない大英雄じゃない！」

真名を聞いた凛は、目を見開いてアーチャーを見る。

「あぁ!?そんな立派なもんじゃねえよ、俺は」

「これは幸先が良いわね。セイバーにも匹敵するレベルよ、貴方」

上機嫌に語りかける凛。アーチャーは少し照れ臭そうにしながらも軽くあしらう。

「でもそれなら、貴方の弓は何処？アーチャー何だから、弓くらい持ってるでしょ？」

「弓？弓は持ってきてねえな。ありゃ、使うのを禁じられてんだ。代わりにこいつが、俺の武器だ」

巨大な戦輪を、軽々と持ち上げるアーチャー。

「弓がない!?それじゃあ、貴方の何処がアーチャーなの!?」

「あぁ！んな事知らねぇよ聖杯にでも聞きやがれ！とにかく、俺の武器はこの戦輪一つだ。命令をくれりゃ、こいつで敵を挽肉にでもしてやるよ」

「やめてよね。そんな事されたら、しばらく食欲が無くなりそう。…　とにかく、受け入れるしかないか。引いたサーヴァントは当たりだしね」

渋々ながらも納得した凛は、脱力感と気怠さを感じ大きな欠伸をする。

「とりあえず、今日はもう寝るわ。貴方の召喚で、相当魔力を使ったみたい。」

「そうか、んじゃリン。俺ぁどうすりゃ良いんだ。偵察にでも出るか？」
「くつろいでくれてていいわ。まだセイバーも召喚されてないし、戦いが起こるには早過ぎるしね」
「あーぁ。暇だなおい。早く戦わせてくれよ」
　共に地下室を出て、居間に来たアーチャーは、近くのソファーにドカッと座る。凛は、自身の寝室へ向かおうとする途中、ふとある事を思い出した。
「アーチャー。貴方の願いって何なの？」
「あぁ？」
　そう、聖杯戦争に呼ばれるサーヴァントには、サーヴァント自身の願いがある。願いを持たない者は、聖杯には選ばれない。それはマスターも、サーヴァントも同じであり、アーチャーにも何かしらの願いはあるのだ。
「それに貴方は神話の中では死んでいない事になっているわ。でも、サーヴァントとして呼ばれるって事は貴方は本当は死んでいた事になる。そのことが、願いに関係あるのかしら？それとも…」
　アーチャーは、しばしの沈黙。デリケートな話題故に、怒鳴ってくるかと思っていた凛には、意外な反応だった。
「…　悪いな。その話は、したくねえんだ」

「別に詮索する気はないわ。貴方の死因も、願いもね。ただ興味本位で聞いただけ。おやすみ、アーチャー」

そうして凛は、階段を上がっていった。

「あぁ…。夜は、苦手だな…」

小さな、悲嘆と、後悔と、僅かな怒りを含んだ呟きだった。

1日前

記憶が、流れてくる。遠坂凛が見たこともない景色、人物、感情。凛は、すぐさまこれが彼の記憶であると理解した。マスターとサーヴァントは魔力のパスで繋がっており、記憶の逆流も起こり得る事だ、と凛はその光景を見続ける事にした。

「何故だ!」

初めは悲嘆。仲間を殺された彼に沸く感情。涙を流し、かつての戦友(とも)を、かつての師(ちち)を想う。

「奴らは、何故あんな事をした!戦士としての誇りは、何処へいった!」

次に、怒りだった。身を焼くほどの怒り。人は、これ程迄の怒りを生み出せるのか、と思う程の激情に凛は身悶える。それでも、目を背ける事はしなかった。

怒り。怒り。怒り。怒怒怒怒怒怒怒「おおおおおぉぉおおおあああぁぁあああーーー!!!」

いつしか身に蓄えて堪えていた筈の怒りは、周りのモノ全てを壊していた。アーチャーは、その怒りに駆られ、自らも戦士の誓いを破ったのだ。殺し、殺し、殺し尽くしても、その怒りは消えなかった。敵を何人血祭りにあげても、敵の野営地を灰にして

も、自らの身を焦がす、憤怒の炎は消えなかった。
アーチャーは、我に帰った後、ひたすら空を見上げていた。体に付いた返り血も、被った灰もそのままに、曇天の空を見上げ続ける。やがて雨が降り、自らの体を流して行く。
「俺は…　俺は…」
雨に濡れ、どれだけ時間が経ったろうか。冷静さは戻り、思考も戻り、復讐を遂げても、
「どうして、この苛立ちは消えてくれない…」
まだ知り合って間もないアーチャーの、恐らくは最も見られたくないであろう記憶。召喚時の彼からは、想像も出来ない程の弱々しさ。
「でも、見ちゃったものはしょうがないじゃない」
きっと、この夢には意味があるのだろう。そうして凛は、現実へと戻っていった。
×
見慣れた天井が、視界に映る。目覚めた凛は、何故か少し体が熱かった。
「んん…」
さっきの夢のせいだろうか。それとも、昨日の召喚でまだ本調子ではない？
「あれ…？もう１０時過ぎてるの…？あちゃー…　まっ今日は学校は休もうかな」
取り敢えずはベットを出て、朝の支度をする。

階段を降りて居間に行くと、アーチャーが姿を現した。
「おぉ、起きたか凛。随分と寝坊助だな！」
「朝から元気ね、アンタは」
「逆に、オメーは元気ねえじゃねえか。どうかしたのか？」
「別に。アタシ、朝が弱いってだけ。特に昨日は、貴方の召喚もあったしね」
凛は気怠そうに紅茶を入れ、ソファーに腰を下ろす。
「んで、今日はどうすんだ？まさか何もしないなんてこたぁねえよな」
「当たり前でしょ。取り敢えず今日は、貴方に街を案内するわ。これから戦う場所の事、知らなきゃでしょ」
×
1日をかけて、アーチャーに街を案内する。途中教会によって、綺礼に召喚した事を告げてきた。それなのにあいつ、何が
「まさか本当に参加するとは、凛には過ぎた刃だろう。うっかり手を切らぬようにな」よ！
本当にいけ好かない奴ね。私が参加しない訳ないじゃない。しかもこんな土壇場で、ミスしてたまるかっての！
最後に、新都で最も高いビルの屋上に登る。

「ここなら、この街全体を見渡せるわ」
「おー、結構広いんだな、この街。にしても、見た事もねえもんばっかだったな」
「え？召喚される時に、聖杯から現代の知識を与えられるんじゃ無いの？」
「必要最低限だけだ。だから街を歩いてるだけでも、結構楽しめそうだな」
　アーチャーは、楽しそうに眼下の街を眺める。日が暮れたこの時間、眼下の街は人工の光に包まれて輝いている。
「俺の時代にゃ、明かりは炎で灯すもんだし、その炎も至高なる神から分けて貰う聖なるもんだ。だが今じゃ、こうして簡単に灯せちまう」
「気に入らないの？」
「まさか、関心してるだけさ。炎を使うのよりよっぽど安全ってな」
　もうすぐ、この街で戦いが始まる。もしかしたら、この風景も失われるかも知れない。既にこの風景の中には、私を除く5組のマスターとサーヴァントがいるのだから。
「行きましょ、アーチャー。案内も終わったし・・・」
「待て凛」
　アーチャーに不意に呼び止められる。明らかに、アーチャーの雰囲気が変わった。念のために念話で話す。
（どうしたの？）

「敵だ。誰かが、俺たちの事を見張ってる。どうやら襲ってくる気は無いようだが・・・どうする？」
（下手に戦うべきじゃ無いわ。恐らくは偵察、私をマスターか探りに来たのでしょう。そして襲って来ないのは、私がマスターとバレたから）
「そりゃ不味いんじゃねえのか？」
（そうでもないわ。私、この地域を統べる一族の魔術師だし、聖杯戦争に参加する可能性が、1番高い魔術師として誰からも警戒されてる。遅かれ早かれわかる事だもの。私も、その為の準備はしてるわ。相手も、不用意には襲って来ないでしょう）
「・・・どうやら、そう見てえだな。気配が薄まって行く」
「他のマスターも、動き出した様ね。最後のサーヴァント、セイバーの召喚前から動き始めてる。早めに戻りましょう、アーチャー」
　屋上を飛び、夜の闇へと消える凛とアーチャー。眼下の光が濃いぶん、影となる闇は深かった。

歪み始める日常

眼前には、ごうごうと炎が燃えている。人が、生きたまま焼かれ、死んだ後もこれでもかというほどの無慈悲さで消し炭にし、人の姿から遠ざけていく。周りにあるのは死と炎だけ。むせ返るほどの死の香り、呼吸もできない熱さと煙、足場は悪くブニブニとした何かを踏みつける。助けを求める声と、助けることの出来ない自分。辛くなり、両手で耳を塞ぐ。それでも声は届いた。

やがて自らも力尽き、地に伏せる。それでも、生き汚く助かろうとし、空を見た。周りの炎を物ともせず、夜空は暗い。その暗さは、もはや俺が助からないと告げている様であり、俺はそこで生きる希望を捨てた。ただ、空を見つめ続ける。何も考えず、何も感じず、心はとうに死んでいた。

だがそこに、一筋の光が、差し込んだ。男は俺を抱き抱える。助けられた俺よりも、助けた男の方が嬉しそうだった。この時、俺は第二の生を得た。今までの俺は死に、新たに生きる希望を見つけた。

衛宮切嗣。俺を助け、身寄りを失った俺を養子として迎えてくれた。俺は、切嗣の遺志を継ぐために、生きている。俺は、皆を護りたい。人類すべてを護れるわけじゃない。

目に見える範囲のちっぽけなもので、ただのエゴかも知れない。だがそれでも、俺はあの時の切嗣の顔を、忘れる事が出来なかった。

×

「おい衛宮！聞いているのか！」

ボーッとしていた俺は、柳洞一成の一喝でビクリとしながら現実に戻った。そういや、昼飯の途中だったっけ？

「えっ？すまん、聞いてなかった、一成」

「全く。昨日の晩に起きた殺人事件の事だ」

「殺人事件!?」

不意な一言に、俺はつい大きな声を出してしまった。幸い生徒会室で昼飯を食う様な奴は俺と柳洞ぐらいのものだから、誰かに聞かれたとかではないと思うが、あれは完全に廊下まで漏れてたな・・・。一成も少し引き気味だ。

「あ、ああ。知らんのか、衛宮？新都の路地裏で、撲殺された死体が見つかったと、昨日のニュースで言っていた。さらに、これも新都だが何でもガスの配管が爆発したとかで道路が抉られていたらしい。まったく、お陰で今日から暫くは部活動を中止して門限を早めるそうだ」

そんな物騒な事が、この街で起きてたのか。桜を遅くに帰すと危ないし、放課後にで

も、今日からは真っ直ぐ家に帰る様に伝えとくか。
「さらに不可解な出来事がもうひと～つ！」
　急に大声を出す一成。さっきの俺の声よりでかいぞ。
「な、何だよ一成。どうしたんだよ」
「っ、失敬衛宮。実はな、遠坂凛、あの女狐が今日も無断欠席したそうだ」
「またか？昨日もじゃなかったか？」
「その通りだ。昨日に続き今日もまた何の連絡もせずに休むなど、あの女狐め。一体何を企んでいる」
　遠坂が休み・・・。それも無断欠席なんて、優等生の遠坂らしくないな。
「あっ、そういえば今日慎二も休みだったな」
「そうだ衛宮。間桐慎二も、今日は無断欠席なのだ。怪しい。怪しすぎる。あの２人、もしかしてデキているのか？」
　名探偵柳洞一成の、恐らくは全く当たっていないであろう推理に、思わず昼飯を吹き出しそうになった。
「ゲホッゴホッ、何言ってんだ一成？お前何か変じゃないか？」
「だがあの２人が何か怪しい事は事実だ。とはいえ、２人のプライベートな事に関わる気はない。あの２人が、よもや事件などに巻き込まれていないか心配なだけだ。あの２

人も、穂村原の生徒なのだからな」

確かに、時折サボる慎二はまだしも、こんなタイミングで2日も無断で休むなんて遠坂らしくない。もしかしたらの事もあるけど、俺遠坂の家とか知らないしなぁ。それに全く接点が無いのに突然行くってのも・・・。とりあえず、放課後に桜と会って、今日からの事と慎二の事でも聞いてくるか。

戦いの始まり

「遠坂先輩のお家、ですか？」
「ああ、もし知ってたら、教えてくれると助かるんだが」
放課後、今日からは家に来ずに、真っ直ぐ帰宅する様に桜に伝えに来たのだが、桜に猛反対されてしまい、何とか話を流そうとしたら、ついこんなことを聞いてしまった。
「一体どうしてですか、先輩？」
明らかに怪しんでいる桜。
「あー、その、最近遠坂が頻繁に休んでるらしくてさ。最近物騒だし、様子でも見に行こうかと思ったり」
「そんなに遠坂先輩と仲良かったんですか？」
何か、桜の口調が強い。少し雰囲気もいつもと違くないか？
「い、いや、そういうわけじゃ無いけど、少し気になってさ。知らなければ別に…」
「突然行って、どうするんですか？それだと遠坂先輩も困ると思いますけど」
しまった。話題を変える事には成功したが、より厄介な事になってないか…？
「まぁ、いいです。遠坂先輩のお家は、先輩のお家とは逆の住宅地の方にあります。…

どうして私に聞いたんですか？」
「つ、ついでだよ。ついで。そっそうだ！慎二の事は何か知ってるか？」
「兄さんの・・・。いえ、すいません先輩、私は何も・・・」
突然、今までの勢いを失い小さくなる桜。
「そうか。まぁ慎二の事だし、明日にはひょっこり顔を出すだろ」
桜も、慎二の事が心配なのかも知れない。取り敢えず、桜を家に送ってから、遠坂の家に行ってみるか。・・・　何か、手土産とかいるんだろうか？

×

桜を送り、そのままの足で遠坂の家に来た。桜に教えてもらったが、一回道を見間違えたせいで、余計に時間を食ってしまった。最近は日が落ちるのも早くなり、既に日の傾きで道の影は濃くなっている。
「これが、遠坂の家・・・」
それは立派な洋館だったが、何処か不気味な印象も感じられた。影が濃くて暗いせいだろうか。それよりも、早く用件を済ませよう。全く接点のなかった、それも同年代の女の子の家に訪れたのだ。門の前でやはり帰るべきか、等と悩んでる内にも時間は進む。
「うーむ、ええい！なる様になれ」

意を決して門に手をかけた所に
「君！その家の者と知り合いなのか？」
「うぅわあああ！」
いきなり声をかけられたせいで驚いてしまった。
「す、すまない。驚かすつもりは無かったのだが・・・」
「い、いえ、こっちこそ、いきなり大声を出してすいませんでした」
声をかけてきたのは、スーツを着た女性だった。男性の様な格好をしているが、その、あの膨らみはどう考えても・・・。でも、この人誰だ？遠坂の知り合いなのか？
「自分は、遠坂さんと同じ学校の者ですけど、貴方はいったい？」
「・・・　失礼。あまり詳しくは話せませんが、まぁ、同業者みたいな者です」
同業者？遠坂、バイトでもしてたのか？何か、この人怪しいぞ。
「それよりも、あなた一体何のようでここにきたのですか？いくら同じ学校の人間と言っても、用がなければ訪れないでしょう」
こちらが質問する前に先をこされてしまった。見知らぬ相手に一から説明するのも面倒だし、適当な理由を言おうと思ったのだが、この僅かな沈黙を相手は警戒と捉えてしまった。
「・・・　失礼ですが、あなたのお名前は？」

「えっ？衛宮士郎、ですけど」
「衛宮・・・？なるほど。あの魔術師殺しの・・・。これはもしかするかも知れません。ランサー。出てきて下さい」
？この人は何を言っているんだ？すると突然、目の前に人が現れた。明らかに突然。さっきまで、何もいなかったのに。
現れたのは中華の武術家然とした服装の男だった。身長は余り高く無いが、纏う雰囲気は素人目に見ても尋常ではなく、その姿を見ただけで衛宮士郎の全細胞が危険信号を鳴らしている。
「余り関係のない人間は巻き込みたくありませんが、今回の任務は今まで以上に過酷ですからね。悪いですが、可能性の段階で処理しておきます」
「やれやれ、また儂に無用な殺生をさせるか。今回のマスターは人使いの荒い事だ」
何を言って・・・
「運が無かったな。小僧」
一瞬だった。男が視界から消えたと思った時には、男は間合いに入っていた。その拳が撃ち込まれれば、俺の命はあっけなく尽きる。だが、抵抗する事はもう間に合わない。そして拳が、俺の心臓を穿とうとした時――――――
「オラァァァァァァ！」

巨大な何かが、俺を襲う男を吹き飛ばしていった。
「ちょっとあなた！一体何やってるのよ！」
そして、僅かにだが聞き覚えのある声を聞いた。
「遠…　坂…」
遠坂凛は自らの自宅の屋根の上に立ち、こちらを見下ろしていた。

初戦

巨大な戦輪が疾走する。大地を削りながら進む戦輪は、その信仰方向の敵を砕こうとするが、小柄な体からどうやってそれ程の力を生んだのか、正面から戦輪を弾き飛ばす。

その戦輪の陰から、アーチャーは襲いかかるが、相手はそれを読んでいたように悠々と対処する。アーチャーにとっては牽制程度だが、凛の視界には捉えられない程の速度の拳が撃ち込まれるが、敵はそれを簡単に受け流した。

「ちっ!」

アーチャーはすかさず飛び退く。あのまま攻めても、恐らくは反撃を受けただろう。肉弾戦に於いては、相手側に分があるようだった。弾き飛ばされた戦輪を拾い上げるアーチャーは、隙を見せない敵に手が出せない。

「何だこいつ!どんだけ人間離れしてやがる!おぉい凛!敵は襲ってこないんじゃ無かったのかぁ!?」

「不用意にはって話よ!それに恐らく、今襲ってきてる敵はさっきの奴とは別人よ!」

アーチャーは怒鳴りつけながらも何処か楽しそうだ。

ついさっき、敵がこちらの監視を辞めたのを見計らって家に戻ろうと思ったのだが、

今相対している敵がいきなり襲ってきた。人混みの中でいきなり刺されるくらい急な襲撃に、私は何も出来なかった。ほんの一瞬早く気付いたアーチャーが私を無理やり突き飛ばしてくれたおかげで難を逃れた。私はアーチャーを召喚出来たからこそ、まだ生きているのだ。

「にしても、こいつ何なのよ。アーチャーとタメを張るくらい強い上に、攻撃の瞬間までアーチャーすら気付けなかった気配遮断。もしかしてアサシン!?」

「暗殺者だ!?それでこの強さたあ、ハハッコイツァ面白くなってきやがった!」

「フハハ。儂もこれ程の実力者とは、生前に於いても戦った事がない。儂も今、猛烈に高揚しておる」

敵のサーヴァントが、まさか自分から口を開くとは。もしかすると、自身のクラスを演じる事に余り執着がないのかしら。でも、感じるプレッシャーはとんでもないわ。まるで空腹の虎と、丸腰で相対してるみたい。その殺気だけで逃げ出したくなる。それでも、

「そうこなっくちゃなぁ!さぁ!どっからでも来やがれ!」

私のサーヴァントも負けていない。現状の実力はほぼ互角。後は敵のマスターがどう動いて来るか…。だったのだが。

「うん?しかしマスターそれは…。あい分かった」

どうやら敵サーヴァントはマスターと会話しているようだが、明らかに戦いの気配が散っていく。もしかして、
「すまんな、赤き戦士よ。どうやら、今回はこれで幕引きのようだ。不意打ちに失敗した時点で引けと、マスターに言われてしまったのでな。この決着は、いずれ着けようぞ!」
敵サーヴァントはそう言い残すと姿を消した。どうやら引いたようだ。
「おぉい!くそ!消化不良だぜ。こっからだったてのによぉ」
「でも、正直引いてくれて助かったわ。敵はこちらの実力を見て引くのを決心した様だけど、敵にはまだ余力というか、切り札があるように思えた」
「そりゃこっちだってそうだろ」
「ええ、でもこんな序盤から使って行くようなもんじゃないわ。だって、私の切り札は一回きり。失敗すれば全てがパーなのよ」
取り敢えず、初戦は危なげなく乗りきれたわね。敵のサーヴァント、クラスはアサシンかしら。まだ、断定する要素が少な過ぎるけど、確かなのは
「さっきの相手、武術の達人だったわね。それも相当の。それに、あの動きには少し見覚えがあったわ」
「ああ。とんでもねえ奴だったな。素手の戦いじゃ、こっちには分がなさすぎらぁ。それより、どうする?ここで待ってたって事は、明らかに凛を狙ったもんだった。このま

ま家に戻るのは危険じゃねえか？」
「そうね・・・。でも、自らの工房を捨てるのは今後の為にもならない。取り敢えず家の近くまでは戻るわ。家が見える場所で、寄って来る奴が居ないか見張っておきましょう」
　そうして再び新都を離れ深山町に向かい始める。まだセイバーも呼ばれて無いのに、戦いが動き出した。敵がなり振り構わず向かって来る事を考慮するなら、暫くは学校に通うのも危険ね。この戦い、どうやら生半可には行けなさそう。
　こうして、第５次聖杯戦争は、未だセイバー未召喚のままで初戦を迎えた。この事を知った各陣営は、動き始める。運命の歯車は、着実に軋みを上げながら動き始めていた。

再戦

「遠…　坂…」
「ちょっとあなた！何してるのよ！」
　それはこちらが聞きたい。目まぐるしく変化する状況に、思考が全くついていかず、ただ眼前の出来事を見ることしかできなかった。
「おらぁ！」
　巨大な戦輪を振り回す男と、さっき俺を襲ってきた小柄な男が戦っている。実力はほぼ互角。２人とも人間離れした動きをしており、地面や周りの壁を次々削り砕いていく。
　一進一退の攻防が続く。戦輪を力任せに大きく振り回すが、それを素手で受け流し反撃する。しかし、その反撃も読まれていたのか空振りに終わり、両者ともかすり傷すら負う事はない。
「はっ、素手でここまでやるたぁ相変わらず器用な野郎だ」
「うぬこそ、もう殴り合いはせんのか？」
　お互いにまだ余裕があるように見えるが、お互いに実力を出さないまま、この戦いは

終わる事になる。
「引きますよ！これ以上、ここで戦う意味はない！」
　さっきのスーツ姿の女性。彼女はこちらに僅かに視線を移しながらそう言い放つ。
「ぬっ、何故だマスター。マスターの正体までバレてしまったぞ。ここは奥の手を使ってでも殺るべきではないか？」
「ダメです。現状では勝率は五分。それに、数的不利を被るかも知れない」
「数的不利？ふむ、まぁ引けと言われれば引くがな」
　こうして、戦いは中断された。
「おいおい！昨日みたいにまた流局かぁ!?」
「すまんな、マスターの命には逆えん。決着を着けたいのはのはやまやまだが、ここは引かせてもらおう」
　去っていく二つの影。遠坂は、それを追うことはしなかった。俺は、このほんの数分の間だったが、何もする事が出来なかった。張り巡らされた空気と緊張が解け、俺がついさっきまで死の淵にいた事を思い出し、ドっと汗が吹き出す。あの男は確かに、俺を殺すつもりだった。
「ちょっとあなたって、ウチの制服・・・？」
　それよりも、聞きたいことがタップリになってしまった。

×

「あなた衛宮くん!? 一体何してるの!?」

「それよりも、今のは何なんだ!? この状況に、さっきのは誰だ!?」

「ハァー、衛宮くんは、この事に関して何も知らないのね」

「あ、ああ」

良かった。それなら…

「私の目を見て」

「えっ…」

次の瞬間、衛宮士郎は物言わぬ人形になった。

「いい、貴方は何も見てないし何も知らない。ここでの事は口にしないで、真っ直ぐ家に帰る。わかった?」

すると衛宮士郎は、さっきまでの騒がしさが嘘のように静かになり、無言で歩いて行った。

「何だ? 今のは?」

「暗示… と言うより催眠ね。魔術師相手には全然効果無いけど、一般人相手なら、強力にやればこんなものね。それにしても、またあのサーヴァントと戦りあったわね」

昨日の夜、突然襲ってきたのも奴らだった。どうして私ばかりつけ狙うのかしら。

「それより、今のガキ殺らなくていいのか？俺らの事知られちまったぞ」
「確かに甘い選択なんだろうけど、無駄な殺しはしたく無いのよ」
　この聖杯戦争に於いて、情報と言うのは値千金の価値を持つ。サーヴァントのクラスが分かるだけでも、かなり有利になる。だからと言って、同じ学校の、少しだけ顔を知ってる人を殺したくは無い。
「にしても、家の前がめちゃくちゃだわ。取り敢えず、入りましょ。やっと戻って来れたんだしシャワーでも浴びなきゃ」
×
「悪いな凛」
　シャワーを浴びて戻って来ると、突然こんな事を言ってきた。
「どうしたのアーチャー。頭でもぶつけた？」
「さっきのガキの事だ」
　真剣なアーチャーの口調に、何処か怪しさを感じる。
「だから何なの？私は衛宮くんを殺す気は無いって…」
「その事でな。凛はそう言うが、さっきの連中はどうだろうな。あの連中が、そんなに甘いようには見えなかったが」
　この聖杯戦争、情報を得る事も重要だが守る事も重要だ。情報を守る為ならば、関係

の無い人間を殺す者だっている。特に生粋の魔術師な程、その合理性を重視する。
「しまった…。アーチャー、あなた最初から気付いて黙ってたわね」
「だから言ったろ。悪いって。凛は殺らないなら、他の奴に任せるだけだ」
　でもこれが、アーチャーの本意でもないのは、ほんの少しの付き合いだけど分かる。アーチャーは本来戦士であり、戦いを神聖視している。だから関係ない人間が巻き込まれるのは本意ではない筈だ。あくまで、サーヴァントに徹しようとしているのだと。
「…　だが、今なら間に合うぞ」
「え？」
「今からなら、奴らとまた戦う事になるがあのガキは助けられる。凛が、例え不利益を被ってでもアイツを助けたいのなら、俺にそう命じろ。俺だって、マスターの方針を曲げたくねぇ」
　つまりアーチャーは、自分は処理したいけど私がダメと言ったから、最後の判断は任せるって言いたいんだ。…　全く、変なところ真面目なんだから。
「私の目的はね、聖杯を手に入れる事はなくて、聖杯戦争に勝つ事なの。私にとって勝つって事は、手段は選ばなくても、信念は曲げない事。そんなことで勝ったって、罪悪感だけ残って何も嬉しくない。だから私は、衛宮くんを助けるわ」
「…　そうこなっくちゃなぁ！」

準備を持って急いで外に出る。使い魔を走らせ、衛宮くんの居場所を探る。
「・・・　ありがとね、アーチャー」
「あ？なんか言ったか？」
「何も。場所が分かったわ。行くわよ、アーチャー」
走り出そうとした所に、腕を出して止めるアーチャー。その視線の先には、1組のサーヴァントとマスターがいた。
「まて凛。どうやら、客だ」
奇怪で、ヨボヨボの老人と、眼帯をした女のサーヴァント。行手を阻む老人は、愉快そうに笑う。
「何処へ行く、遠坂の娘よ。今宵は、良い月じゃな。戦いを始めるのに、ぴったりとは思わんかね」
空には、雲から顔を出した満月が浮かぶ。冷たい風が吹き抜けると、老人の姿は消え無数の蟲が現れた。一刻を争う状況の裏で、聖杯戦争は最後の英霊を迎えようとしていた。
そして、運命は動き出す。

運命の夜

「何故引いたのだ、マスター。それも2度も。あの敵に、情報を与えすぎだ。それに、あやつなら恐らく、宝具を使えば倒せた筈だ」

猛々しい声を出す赤い中華服を纏った男。共にいるのはスーツを着た男装の麗人。

「さっきの戦い、誰かに見られていましたよ。それに、数的不利の可能性もあった」

「そこだ。数的不利とは何の事だ。あの場に、相対する者など居なかったではないか」

そうあの場には、アーチャーとランサーしか居なかった。使い魔が覗いてはいたが、戦いとしては一騎討ちの様相だった。そこに水を刺された事に、ランサーは苛立ちを顕にする。

「可能性の話ですが…　あの少年が怪しかった」

「あの小僧が?だが、儂の動きに全く付いてきていなかったがな。そうそう、サーヴァントと打ち合えるマスターなどいないだろう」

「ええ、私だって貴方と戦ったら5分と持ちません。ですがあの少年は、魔術師殺しと言われた魔術師「衛宮切嗣」の息子、ないし後継者の可能性が出てきた。それがもし、遠坂の娘と結託しているマスターだとしたらどうしますか?」

魔術師殺し、衛宮切嗣。魔術師らしからぬ手法で次々と同族を狩っていった彼も、第４次聖杯戦争に参加したと聞く。その後の詳細は不明だが、この冬木に彼と同じ名を持つ者が現れた以上、警戒する事に越した事はない。

「あくまでも可能性の話だろう。それでみすみす情報をやるとは、マスターはちと慎重すぎないか？」

「・・・　私も、今回の任務にどうやらまだ慣れていない様です。慎重になっているのはどう動くか方針を掴めていないからかもしれません。不甲斐ないマスターですね・・・　私は」

「反省よりも行動であろう、マスター。早くせねば取り返しの付かないミスになるやも知れんぞ？」

「そうですね・・・　取り敢えず、あの少年を探りましょう。マスターかどうかと、そうでないと場合は情報を保護しなくては」

×

「はっ！」

家に着いた時、ようやく体にかけられた催眠の様なものを解く事が出来た。どうやら遠坂の魔力を体内に流されて、意識がハッキリしなかったらしい。普段の鍛錬の要領で、体内に魔力を流してようやく流れを取り戻した。

だが、状況は変わらない。俺にはさっきの事がさっぱりわからない。いきなり命を狙われたと思ったら、人間離れした戦いは始まるし、遠坂は普段と様子が違うし、おまけに魔術師ときた。

「もう一度遠坂の家に行っても、どうせラチがあかないだろうしなぁ…」

だが、この状況を説明できる人物を、俺は遠坂しか知らない。やっぱりもう一度遠坂の家に…。

天井から鐘の音がして、背筋が凍った。この音は、家に張られた結界に誰かが侵入した音だ。見知らぬ、誰かが。

「一体誰が…。さっきの奴ら…。まさか遠坂、なんて事はないよな」

とにかく、周りに何か武器になる物を探しておかないと。まだ少しは時間が…。

その時、背後に何かいると悟った。誰かがいると言う気配ではない。過去に一度、味わった事のある死の気配を。このままここに居れば、俺は、死――――――

すかさず、横に跳躍した。刹那、俺の頭があったところへ容赦ない拳が打ち込まれる。

咄嗟の跳躍で受け身をとる事もできなかったが、俺はまだ生きて、俺を殺しにきた敵を視界に捉える事ができた。

「ほぉ、この一撃を躱すとは。儂の存在に気付いておったのか？」

さっきの、ついさっき俺を殺そうとした男が、またやって来たのか。

「少しは、心得がある様だが、いつまで持つかな。儂は、悪いが手加減できるタチではなくてな。何せ、様子見だけで殺してしまった事もある」
　コイツ、素手だ。だが、さっきの戦い振りから見て、武器を持ってもハンデにすらならない。だが、同じ土俵で戦うよりはマシだ。何か軽く振るえるものは…　ない！居間の方へ飛んじまって、武器に出来るものがない。
「さてここからどうする？諦めるなら、苦しまない様にしてやれるが」
　ドンドンと歩み寄ってくる。とにかく、ここはまずい。土蔵に行けば、何か有るかもしれない。
「ふざけんな。誰がお前なんかに殺されるか」
　手に届く範囲にあったのは、座布団1枚だった。絶望的だが、これで凌ぐしかない。
「――――同調（トレース）、開始（オン）」
　自己を作り替える暗示の言葉とともに、座布団に魔力を通す。だが当然ながら、どう強化しても座布団は武器にはならない。
「フッハッハッハッハ！それで戦いと言うのか！面白い！ハッハッハッハ！」
　相手は高笑いしながらこちらが準備を終わらせるのを待っている。舐めやがって。だが好都合だ。正直、この隙に相手が攻撃してきたら、俺にはなす術が無かった。
「――――全工程（トレース）、完了（オフ）」

準備は整った。とにかく、土蔵目掛けて突っ切る。僅かに、進行方向とは逆に視線を切る。相手がそちらに意識が飛ぶほんの一瞬でも、時間が欲しかった。視線を切った瞬間、襖(ふすま)を破りながら廊下に飛び出る。そして中庭への窓に向かおうとした時、

「なんだ逃げるのか？」

敵が、拳を構えて廊下に躍り出た。位置は俺の僅かに後ろで、俺の右脇腹むけて打ち込もうとしている。俺は両手を使って、座布団を盾に攻撃を受け止める。

武器にならないから盾にすれば良い。座布団の弾力性を強化し、敵の打撃の威力を軽減しようとした。コンクリートの地面にヒビを入れていた様な威力だ。全てを受けきれなくてもいい。骨で済めば良い方だろう。とにかく土蔵へ――――

だが、この考えは甘かった。いや、甘過ぎた。敵の一撃の重さを、完全に測り違えた。結果、戦闘不能の傷を、負うはめになった。

確かに盾は、敵の一撃を食い止めたが、それも一瞬。貫通した衝撃は、俺の体を吹き飛ばし派手にガラスを叩き割りながら俺を中庭へと追い出した。だが、この一撃で右腕の骨はおろか、あばらまで折れてしまった。痛みで、まともに動く事も出来ない。何とか這いながらも土蔵へつくが、もはや武器を振るう力など残ってはいなかった。

「儂の一撃を受け止めるとは。まさか柔らかい盾とな。その発想のおかけで一撃は耐えたが、どうやら次はない様だな」

土蔵まで追ってきた敵に抗う事は、もう出来ない。俺には、もうそんな力はない。
「ふむ、では悪いが死んでもらう。普通の人間にしては、粘った方だぞ」
死の一撃が、打ち込まれる。この一撃は心臓を穿ち、俺の息の根を完全に止めるだろう。さっきまでは早過ぎて捉えられなかった動きが、今ではスローに感じる。
（あぁ…　俺はここで、死ぬのか…）
刹那、走馬灯の様に、記憶が走る。何気ない日常の記憶から、深く覚えている事まで、時を遡っていく。
（桜…　一成…　慎二……　切、嗣）
そしてたどり着く、始まりの記憶。衛宮切嗣に救われ、拾われたあの日を。そして、切嗣の夢を継ぐと決めたあの日を。
（死ぬだと!?ふざけるな!?俺はまだ、何もしちゃいない！誰も助けれていない！）
抗う。最後まで、無駄だとしても。
「まだ、切嗣との約束が、残っている！護ると！決めたんだ！」
無駄な足掻き。いくら衛宮士郎が叫んでも、抗っても、状況は覆らない。無慈悲な一撃は、たやすく衛宮士郎の命を奪うだろう。だが、この叫びが、想いが、奇跡を呼ぶ。全身の魔力が駆け巡り、土蔵の中に光が生まれる。衛宮士郎は、自分の体が熱くなるのを感じた。誰かの呼びかけに、答えなければと。

「ぬっ！」

瞬間、衛宮士郎を襲っていた赤き刺客は、土蔵の外へと飛び出る。そして入れ替わる様に、1人の女性が衛宮士郎の前に立った。

「問おう、貴方が、私のマスターか？」

セイバー召喚

「何なのよ！・もう！」

遠坂凛は、衛宮邸へ急いでいた。出発した直後、正体不明のサーヴァントとマスターに襲撃されたが、お互い特に傷を負う事もないまま、敵は後退していった。ただ私たちをほんの少し足止めするだけの様な戦い方だった。

「このままじゃ間に合うかどうか・・・」

アーチャーの言い分だと、急いで向かってやっとだったと言うのに、無駄な時間を食ってしまった。

「すまねぇ凛。俺の落ち度だ。俺がさっさと伝えてりゃ・・・」

「気にしないで、アーチャー。もし間に合わなくても、仕方のない事だった。この戦い、一般人が巻き込まれるのはしょうがない事でもあるわ。衛宮くんには悪いけど、助けられなかったとしても巻き込まれた彼が不運だっただけ」

遠坂凛も、魔術師である。必要なら人を殺す覚悟も持って、この戦いに挑んでいる。たとえ手遅れだったとしても、彼女はそれを理由に危険を冒してまで仇を取る、などという事はしないだろう。

「でも、私とアーチャーには責任があるわ。出来るなら、仇は取ってあげる」
最後のサーヴァントがいる事も知らず、ただひたすらに街を駆けていった。
×
「問おう、貴方が私のマスターか？」
いきなり現れたこの女性は、まず最初に俺に話しかけてきた。褐色の肌に白い髪、頭にはターバンを巻いている。凛とした顔立ちの彼女は、女性でありながら軍服がよく似合った。
「マ・・・スター・・・？」
だが、言ってる事は理解できない。マスターとは何だ？一体俺は、何に巻き込まれたんだ？
「・・・これより我が誉れは、祖国と、貴方を護ることにある。ここに、契約は完了した」
だが、一つだけハッキリしている事があった。彼女は、俺を守ってくれた。殺される直前だった俺を、助けてくれた。
「さて、まだ敵は残っている。すまないがマスター、治療は後回しだ。ここでおとなしくしていてくれ！」
「なっ、待て・・・」
こちらの制止も振り切って、彼女は土蔵の外へ飛び出していく。まさか・・・奴と戦う

つもりか!?痛みで、動く事もままならないが、壁にもたれながらヨロヨロと立ち上がり、土蔵の外へと出る。そこでは、昼間に見た様な想像を絶する人外の戦いが繰り広げられていた。

彼女の武器は、サーベルと装飾の施されたライフルである。銃を持つ彼女と、徒手空拳の敵とではこちらに大きく分がある様に思えた。実際敵は、距離をとって弾をかわしている。しかし、銃には当然ながら弾数があり、それが尽きれば装填しなければならない。敵は、その隙をついてくる。

が、これはあくまできっかけに過ぎない。双方共に、このタイミングを待っていたのだ。敵は何と、１０メートルはあろう距離を、たった二歩で詰めてきた。その勢いのまま、拳を打ち込もうとするが

「甘いぞ！」

彼女はサーベルで応戦する。敵からの位置では、あのサーベルは体で隠れて見辛いはず。敵は攻撃から回避に移るが、少し入り込み過ぎていたのか、受け流しきれずにわずかに傷を負った。刃先数ミリ程の浅い傷ではあるが、あの敵にも攻撃が通るのか、と感心せずにはいられなかった。

「ふむ、この一撃は分かっていたが、銃を意識し過ぎた様だ。まさか、あの状態から応戦が間に合うとは。さすがセイバーは伊達ではないか」

「そちらも、凄まじい体術だ。よほどの武術家なのだろうな」
「だが、ある程度の実力と、その剣の長さは把握した。儂の一撃を凌げるかな?」
敵は、大きく踏み込み地面を揺らす。構えを整えた敵には、素人の俺でも分かるほど隙がなかった。全身から放たれる殺気。彼女に、あの敵を倒せるだろうか。
違う!俺は何を他人に任せようとしているんだ。俺も、戦わなくては。この体でも出来ることを…。
カラン!カラン!突然の鐘の音に、この場にいた全員が反応した。今のは、この家に誰かが侵入してきた時の音で、家の塀の上、丁度中庭が見える位置に、来訪者は立っていた。

名乗り

冬木の空を、針金の鳥が舞う。その鳥が見たもの、聞いたものは、主人である少女の元へと届けられる。冬木から遠く離れた郊外の森の奥、そびえ立つ城は森の中にあるのがおかしいほど絢爛であった。その城の主人にして、聖杯戦争のマスターの一人である少女は、傍らにサーヴァントを従えながら使い魔からの情報を観ていた。

「ふーん。お兄ちゃんも、マスターになったんだ。ちょっと、面白くなってきたかも」

「何がだよ、マスター」

甲冑を着込んだ男が、少女に話しかける。

「いくよ、バーサーカー。お兄ちゃんに挨拶しなきゃ」

「誰だそいつ？」

「私の言った、面白い相手。場合のよっては、殺しちゃって良いよ、バーサーカー。とびきり、残虐な方法でね」

少女は笑う。月に照らされた顔は、見た目通りの愛らしさと純粋さを彷彿とさせる。が、その純粋さは純粋な殺意であり、歪んだ憎悪が少女の中には渦巻いている。その対象は、セイバーのマスターとなった、衛宮士郎に対してのものである。

×

「一体、どうなってるのよ」

塀の上に立つ遠坂は、俺の事を驚きの目で見ている。そして、先ほど呼ばれた彼女の事も。

「衛宮くんが、魔術師でセイバーのマスター・・・。ふざけないでよね」

中庭は、また別の緊張感に包まれていく。戦いは中断され、3人のサーヴァントは、お互いを意識し睨み合っている。それぞれがいるせいで、誰も動けずにいた。そのまま、静寂が続く。その間遠坂は俯き、何か考え事をしていた。

最初に動いたのは、俺を襲ってきた男だった。何と、再び逃げたのである。いや、逃げたというよりは引いた、と言った方が正解か。あの男の実力なら、この中の誰にも引けを取らない筈だ。

「やれやれ。この儂が、こう何度もしっぽを巻いて逃げ出す羽目になるとは」

去り文句を言い残し、男は夜の闇へと消えた。

「逃すか・・・」

「待ってアーチャー。追わなくて良いわ。それよりも大事な相手が残ってる」

ついに遠坂と一対一。全く訳が分からない状況が続いているが、もしかすると遠坂もさっきの男の様に俺を襲ってくるかもしれない。とにかく、敵意がない事を伝えなけれ

ば。
「遠坂･･･」
「黙りなさい!」
　一喝され、びくりと次の言葉を飲む。
「いい、衛宮くん。私の質問に答えて。答えないなら、ここで消すわ」
　遠坂の声は冷たい。本気だ。俺に拒否権はないと理解し、無言で頷く。
「貴方が、セイバーのマスターで間違い無いのよね」
　いきなり、分からない質問が来た。このセイバーと言うのが、さっき現れた彼女だと言う事は分かるが、マスターと言うものが何なのかは分からない。だが答えなければ、俺は遠坂に殺される。それだけは避けなくては。
　彼女･･･　セイバーの方をチラリと見る。セイバーは小さく頷き、俺はとりあえずの返答をした。
「あ･･･　ああ、俺がセイバーのマスターだ」
「そう、じゃ貴方は魔術師なのね。それじゃ貴方誰かと組んでたりする?･ここに来る途中、明らかに不審な襲撃を受けた。時間稼ぎにしか考えられなかったけど、それって貴方のセイバー召喚を行うためのもの?」
「･･･　いや、違う。俺には今、何が起きてるのかさっぱり分からない。いきなり、この状

況に巻き込まれたんだ」
「巻き込まれた?それじゃあ、昼間私の家を嗅ぎ回っていたのは何なのよ」
うっ、嫌な質問だ。でも、下手な嘘を付くよりはマシだろう。
「あ… あれは、その… 遠坂は心配だったから」
やはり、どんな状況でも恥ずかしく感じる。ほとんど接点のなかった女子の家に、心配になったから突然訪れたなどと。
「心配になった!?どうして衛宮くんが、私の心配をするのよ」
やはり遠坂にとっても予想外だったのだろう。さきほどまでの空気が少し崩れた気がする。話を聞くには今しかない。
「最近物騒だったからな…。それよりも遠坂、今、一体何が起きてるんだ。俺は一体何に巻き込まれたんだ」
遠坂は、この出来事について知っている。この突然セイバーが現れた事についても。それを教えて貰わなければ、俺はどうすればいいかも何もわからない。
「… 本当に、何も知らないのね。良いわ、教えてあげる。この聖杯戦争の事について」
「聖杯戦争… ?」
一体、それは何なのか?戦争とつくからには、物騒なものなのだろうか?
「でも、ひとつだけ条件があるわ」

「条件…？」
「そ、条件よ。貴方のサーヴァント、セイバーの真名を教えて貰うわ。そうじゃなければ、今ここで貴方たちの命をもらう」
「真名…？次から次へとわからないことが多すぎるぞ、遠坂」
　だが、今ここで切り出してくると言う事はよほど重要な事なのだろうが、俺にはどうしようも無い。何故なら俺は、彼女の真名とやらを知らないからだ。判断をしかね、セイバーの方を見る。
「私は、あなたに聞いているのよ、セイバー。貴方のマスターを見逃して欲しかったら、真名を名乗れとね」
　俺にじゃなく、セイバーに？つまりそれは、俺よりもセイバーの方が困ると言うことか？それなら、
「セイバー、悩む必要は無い。その、真名ってのの重要さは分からないが、それを教えたせいでセイバーが困るって言うんなら、言わなくて構わない。その時は、俺だけでこの状況を何とかしてみせる」
　セイバーには、既に命を救われている。そんなセイバーには、迷惑を掛けたくはない。
「衛宮くん、貴方状況は分かって…」
「シロウ」

セイバーが口を開き、全員がそちらを向く。セイバーの声は、広い中庭にもよく通った。

「言っただろう。私の誉れは、貴方を護る事にあると。ならば私が迷うことなどない。よく聞いておいて欲しい。私の名前を」

セイバーは剣を掲げ、高らかに名乗りを上げた。その姿に、俺も、遠坂も、圧倒された。凛々しく、逞しい姿。月光が照らし、幻想的な姿。その姿はまさしく、英雄の姿そのものであった。

「我が名はラクシュミー　・バーイー!ジャーンシー王国の王妃である!」

束の間の一息

私は、護れなかった。かつての王国を。民たちを。侵略者共に理不尽に奪われ、反乱の仲間にも疎まれた。私は諦めなかったが、それで止められるほど簡単な事ではなかった。しかし、認める事は出来なかった。女子供も巻き込んでまで戦ったのには、意味がある。

私は、今度こそ護り抜くと決めたのだ。その為ならば、私はこの身を削り戦おう。その対象がなんであれ、私はこれ以上、無力な人間ではいたくないのだ。

×

「我が名はラクシュミー　・バーイー！ジャーンシー王国の王妃である！」

高らかに名乗りを上げるセイバー。ラクシュミー・バーイーと言うと、インドの大反乱の際に素人の軍を率いて戦った女傑だったか？敵方のイギリス軍でさえ、彼女を称賛し「インドのジャンヌ・ダルク」と称したという。でも彼女は、１００年以上も前の人物だぞ!?セイバーがそうだって言うなら、セイバーは過去から来たとでもいうのか？

「本当に教えてくれるなんて…　別に教えてくれなくても、襲う気はなかったのに。ハッタリよ、今の」

「「へ？」」

俺とセイバーは、同じタイミングで声を出した。とてもハッタリには聞こえなかったんだが・・・。セイバーも、やってしまったという様な顔をしている。

「衛宮くんが巻き込まれたマスターだって事は分かったわ。つまり、この聖杯戦争に関して何も知らないって事よね。そんな相手と戦っても、フェアじゃないもの」

遠坂は塀を降り、中庭を歩いて屋敷に向かう。

「とりあえず、中にでも入りましょ、衛宮くん。ついでにそこの窓も直してあげるわ」

「あ、あぁ」

とにかく、遠坂が襲ってくる事はなくなった。目まぐるしく状況が変化していたが、ようやく一息ついた時、全身に激痛が走った。さっきの殴られた痛みが、まだ残っていたのだ。

「衛宮くん、怪我してるの!?」

「シロウ、しっかり」

セイバーが肩を貸してくれる。そのまま屋敷の方へと戻って行く。遠坂には聞きたいことが山ほどある。

×

「とまぁ、これが聖杯戦争の簡単な説明ね。後の事は、監督役のところに行ってから聞く

と良いわ」
　怪我の手当てをしながら、簡潔な説明をされた。聖杯戦争とは、７人のマスターと７人のサーヴァントの計７組が聖杯を巡って争うもので、それは最後の１組になるまで続く。サーヴァントとは、過去の英雄や神話の英雄、果てには伝承のみの実在するかどうか怪しいものまでをクラス分けし、英霊の座と呼ばれる場所から召喚するのだという。
　俺の読んだセイバー、ラクシュミーもそうだ。なんでもセイバーはサーヴァントの中でも最優らしく、遠坂には嫌味多めに説明されてしまった。当然ながら遠坂もマスターの一人であり、聖杯戦争に参加しているらしい。
「その監督役ってのは？」
「言葉通り、不祥事が起きないか監督している神父よ。この聖杯戦争は、勝つ為ならどんな手段でも使われる。それこそ、一般人を巻き込むものまでね。それが魔術によるものだと世間に知られるのはマズいし、度が過ぎるものは相応の対処をしなくちゃいけない。だからこの聖杯戦争について聞くなら、監督役のところへ行った方がいい」
「一般人を巻き込むって…。それじゃあ、最近起こったていう殺人事件なんかも」
「そうかもね。でも、今後さらに激化するとなるとより多くの人間が巻き込まれる事になるかも」
「そんな事があってたまるか！」

感情が昂って、大声を上げてしまった。自分の知らない所で、こんな事が起きていた事と、自分の無力さへの苛立ちが募る。

「と、とにかく聖杯戦争を正式に始める為にも、教会へは行った方がいい。それに衛宮くんみたいなマスターも、教会へ行ったほうがいいわ」

「?.なんでだ?」

「それは行ってから直接聞いた方が早いわ。で、衛宮くん。どう?教会までは距離があるけど動けそう?」

状況を知った今、痛みなんて気にしていられない。一刻も早くこの馬鹿げた戦いを終わらせなければ。

「問題ない、遠坂。早く出発しよう」

痛みを我慢して立ち上がる。セイバーが再び肩を貸そうとしたが、今回は断った。なんだか、いい匂いがして、痛みは和らぎそうだが・・・。

「そうね。とりあえず、私もついて行くわ。言っとくけど、今回助けたのは貴方がまだ正式なマスターじゃないから。もし貴方が戦うなら、私は容赦しない」

今度は、間違いなく本気だ。遠坂にも、何か覚悟があるのだろう。

夜は更に深くなって行く。月が雲に隠れては現れ、再び大地を照らす。その先には、少女とそのサーヴァントが衛宮士郎を目指して歩いていた。聖杯戦争初日の夜は、まだ

終わらない。

戦う決意

1時間ほどかけて、ようやく教会へたどり着いた。既に真夜中で、世界は完全に静まり返っている。

道中では往来する車や、路地裏の暗闇でさえ、誰かが潜んでいるかの様な気がした。今までなんでもなかった場所が、今では虎の巣の様に危険で近づきたくない。

階段を登る。丘の上の教会も、今ではまるで違って見える。人々が救いを求めてやって来る教会が、今は来るものを決して帰さない牢獄の様に不気味に感じる。元々、この教会は好きではなかった。10年前の火災の孤児たちは、俺も含めてこの教会に引き取られるはずだった。その中で俺だけが、切嗣の子として出て行った。その事を負い目に感じていた俺は、あまりこの教会には近寄らない様にしていた。思えばこの避ける気持ちが、この教会に対して悪いイメージを持たせているのかも知れない。

「さっ行くわよ衛宮くん。アーチャーは、外で見張りをしておいて」

遠坂が扉を開けて入って行く。その後に続いて、意を決して教会に入る。

教会の中は暗かった。既に夜中。明かりも消え、差し込む月明かりだけが頼りだ。そんな状況でも、一人だけ参拝者が来ていた。外国人だろうか、若い男で髪は金色で目は

赤い。その男は入ってきたこちらをジロリと見ると、俺たちの横を素通りし教会を去って行った。俺と遠坂は、何故かその男をずっと見ていた。
「こんな夜更けに訪問者とは、珍しい事もあったものだな凛」
　教会に響く声に振り返った。そこには長身でがっしりとした体格に神父服を着込んだ、この教会を管理し、そして恐らくは聖杯戦争の監督役であろう神父が立っていた。
「彼が7人目か？私は、言峰綺礼。この教会を任されている神父だ。君は？」
「俺は、衛宮士郎。その最後のマスター・・・ってので、合ってると思う」
「衛宮・・・」
　神父は、少し驚いた様な反応をした。
「ふっ、なるほど。運命というものは実に皮肉だ。で、合っていると思う、と言うのは？君が、セイバーを召喚したのではないのかね？」
「衛宮くんはね、たまたま召喚しちゃったのよ。巻き込まれた良いってもいい。まだ衛宮くんには、マスターとしての自覚も、覚悟もないわ」
「それでここに連れてきたのか。では君には、聖杯戦争がなんたるかを説明せねばならないな」
「それはもう遠坂に聞いた。7人のマスターとサーヴァントが、聖杯を巡って争うって」
「ほう、そこまで知っていて何を迷う。あらゆる願いを叶えられる機会を、君は手にした

のだぞ。ならばすぐにでも、戦いの準備をした方が良いと思うが」
「俺には戦うつもりなんてない。俺はただ、この戦いを終わらせに来たんだ」
「終わらせる?」
「ああ、聖杯戦争でこの街の人間が巻き込まれるかもしれない。そんな馬鹿げた事で、この街の人達が巻き込まれるなんて、俺には感化できない。あんたが監督役だって言うなら、聖杯戦争を止められるだろ。もしくは、その方法を聞きにきた」
「ちょ、ちょっと衛宮くん!」
遠坂が話しかけて来るが、制して話を続ける。
「そもそもその聖杯を奪い合う必要もないだろ。みんなが必要なら、みんなで分け合えば良いじゃないか」
「・・・ ふっ、君は誤解している様だな、衛宮士郎。まず第一に、この聖杯戦争を止める手段はない。もちろん、私にもそんな権限はない。一度始まった聖杯戦争は、最後の1組になるか機嫌が過ぎるまで続けられる。そして、聖杯を分け合うと言ったな。これも無理だ」
「・・・ どうして」
「聖杯は、あくまで器だ。中には何も入っていない伽藍堂。その中に、魔力を満たす必要がある。それを満たすものが、サーヴァントだ。サーヴァントは敗退した後、その魂は

聖杯に保管される。そうする事で聖杯はようやく、願望機として機能する」
「止める方法がないなら、期限切れまで待てば・・・」
「それも無理だ。どのマスターも、了承する筈がない」
　止める手立てはないと、あらゆる可能性を否定され続ける。俺は怒りを露わにした。
「一体なんだって聖杯なんて求める！他人を巻き込んでまでする価値のある事なのか！」
「聖杯戦争に参加できるのは魔術師だけだ。魔術師の願いは、最終的に根元にたどり着く、と言う一点に集約される。誰も見たことがないがある筈だ、と言うものに命をかける。それは、それは魔術師達にとっての存在価値、生きる意味だ。それは君の理解の及ぶ範囲を超えている。分からなくて当然だ」
「だからなんだって言うんだ。ならどうやって止めれば・・・」
「勝てばいいのだ、衛宮士郎。他のマスターを全て倒し、お前が戦いを終わらせればいい」
「なっ」
　その言葉に、息が詰まる。街の人間を巻き込まない為に、マスターを殺す。だが、俺にそれができるのか？
「衛宮くん、何もマスターは必ず殺すわけじゃないわ。サーヴァントさえ倒れれば聖杯

は満たされる。リスクはあるけど、マスターは殺さない手もあるわ」
「俺は…」
「では、一つ教えておこう、衛宮士郎。１０年前の大火災。あれが聖杯戦争が原因だったとしたら、どうする？」
「え…」
　１０年前の火災が、聖杯戦争が原因…？
「冬木を突如襲った原因不明の大火災。だが私は、参加者としてあの光景を目にした。最後の最後に、衛宮切嗣と戦い敗れたが、一命は取り留めた」
　切嗣が、聖杯戦争の参加者だった…？ちょっと待ってくれ。
「衛宮切嗣はまさに魔術師を体現していた。勝利の為ならばどんな汚い手でも使った。だが、何故か奴は最後聖杯を破壊する道を選んだ」
　切嗣が勝つためにあらゆる手段を…？
　一気に情報を押し付けられて理解が追いつかない。思考が定まらず頭がグルグルし、吐き気もして地面に膝をつく。
「少し、待ってくれ…」
　とにかく、頭が整理出来ない。
「…どうやら、その時間はない様だぞ。厄介な客が訪れた様だ。早く決断しろ、衛宮士

郎。戦いを放棄するならばそれもいい。令呪を剥奪してセイバーとの契約を切る。これで晴れてお前はただの一般人だ。だが戦うと言うのなら武器を取れ。お前の中にある正義とやらは、そんなに安っぽいものなのか？」

その一言に、ハッとする。分からなくてもいい。理解できなくても、認められなくても、俺がするべきなのは一つだけだ。

―――――――――正義の味方になると、決めたのだから。

「俺は、戦う。マスターとして戦って、この聖杯戦争を終わらせる」

「ならば既に、ここに敵が訪れているぞ。凛もどうやら、そちらに向かった様だ」

俺はすぐさま教会を出る。去り際に、言峰は俺に向かって何かを話していた。

「・・・　だが衛宮士郎。正義の味方には、明確な悪が必要だ」

こうして聖杯戦争は加速して行く。戦いの終着点へと。

狂戦士の宴

「誰だおめぇら」

教会に訪れた二人組の行く手を阻む様に実体化したアーチャー。白髪に赤い目、そして凄まじい程の魔力を放つ少女とその傍らに立つ甲冑を着込んだ男。明らかに異様な二人は、間違いなくサーヴァントとマスターである。

「てめえこそ、何姫さまの前に突っ立ってんだよ。さっさとそこをどきな。それとも、殺されてぇのか?」

「あぁ!?」

睨み合う二人。アーチャーは戦輪を手に、鎧武者は持つ槍を構え戦いの姿勢をとる。

「アーチャー! 敵よ!」

「わかってる!」

教会を出て駆け寄ってきた凛を制止させる。アーチャーは相対する敵を前に、下手に動けなかった。

(んだこいつ… とんでもねぇ殺気を放って今にも飛びかかってきそうなのに、それをしっかりと我慢してやがる)

いっそ挑発でもしてみるかと考えたアーチャーだが、戦いの火蓋は少女の一言で切って落とされた。
「…　そこにいるんだ、お兄ちゃん。初めていいわよ、バーサーカー。この教会にいる人間を、残らず殺しちゃいなさい！」
瞬間、飛びかかってきた。イカれた目をしてる割に、主人の命令には従うのかと感心さえしたアーチャー。
（とりあえず、初撃は受けるか…）
力量を見計らう為に防御をするアーチャー。槍を振りかざし、大振りの一撃を加えるバーサーカーに、寒気を感じたアーチャーは咄嗟に回避に移る。
「嗤え！人間無骨！」
×
教会を飛び出て、遠坂のいる場所へ向かう。既に戦いは始まっていた。
「遠坂！」
「衛…　宮くん…」
遠坂の声には覇気がない。何故なら、アーチャーは一方的にやられていたからだ。
「グッ！」
「ひゃはははは！死ねや！」

アーチャーは体に、大きく切り裂かれた傷を負っていた。逆にあの傷であそこまで動けるのも不思議だったが、あれでは長くは持ち堪えられそうもない。
「セイバー!」
セイバーに声掛けをする前に、セイバーは既に動いていた。銃で牽制し敵の動きを止め、アーチャーとバーサーカーの間に割って入る。
「引け!弓兵よ。ここは私に任せろ!」
「余計なこと・・・ すんじゃねぇ・・・ 俺はまだ・・・」
しかし傷が深いアーチャーはその場に膝をついて動けなくなってしまった。
「衛宮くん。どうして助けるの。私は敵なのよ。」
「そんなの関係ない。殺されそうになっているのを見過ごすなんて出来ないし、そもそも遠坂には借りがあるだろ。俺のことを見逃してくれたどころか、ここまで案内もしてくれた」
「それは貴方がまだ正式なマスターじゃなかったからで、今の貴方と対峙したら、私は躊躇なく貴方を殺すわ!」
「だったらそれでもいい!ただ俺は遠坂がいい奴だから、死なせたくないだけだ!」
「優しいんだね、お兄ちゃん」
突然、少女は俺に話しかけてきた。冷たい月の夜。冷え切った空気を切り裂く様に。

「貴方が、エミヤシロウ？私は、イリヤスフィールフォン・アインツベルン。始まりの御三家であるアインツベルンのマスター」
少女は礼儀正しく一礼をしながら名乗りを上げる。その姿はただ育ちが良いだけの少女で、とてもマスターには見えなかった。だが彼女は紛れもなく、あの鎧武者のマスターなのだ。
「会いたかったよ、お兄ちゃん」
「：俺に何の様だよ。会ったのは、今日が初めてだろ」
「そうだね、でも貴方の事は冬木に来る前から知っていたわ。キリツグの、新しい息子だって」
新しい…？
「私はね、復讐に来たのよ。私を捨てたキリツグにね。でも、キリツグは死んでしまった。その代わり貴方と言う新しい子供を残した」
つまり少女は、もともと切嗣の子供だったって言うのか？
「ずっと殺したかったよ、お兄ちゃん。やっちゃいなさい！バーサーカー！」
今日は本当に、色んな事を教えられても理解する時間すら与えてくれない！
バーサーカーが、セイバーに襲いかかる。横なぎに振る十字槍を、受け流そうとするセイバー。

「セイバー！そいつの攻撃を受けちゃダメ！避けなさい！」
　その前に、隣の遠坂がセイバーに教えたおかげで、セイバーは間一髪攻撃を避ける事ができた。だが、その後も追撃は続く。
「アーチャー！貴方は下がってなさい！その傷じゃ無理よ！」
「クソっ・・・」
　アーチャーは攻撃に巻き込まれる前に、霊体化して姿を消す。
「どうしてだ、遠坂!?」
「バーサーカーの宝具よ。どうやらあらゆる防御を無効にして攻撃を通してくるらしいわ。まだ推測の域だけど、アーチャーはそのせいで、あんな深手を負わされた。人間無骨・・・　人間無骨・・・。あーもう思い出せない！それよりもどうなってるのよ！いきなり宝具を使ってきたと思ったら、その後もずっと発動しっぱなしじゃない！」
「宝具って、遠坂の説明じゃとっておきの最終手段で消費魔力も激しいからギリギリまで取っておくものなんじゃなかったのか!?」
「そのはずなんだけどね・・・。バーサーカーの身体能力の高さと相まって、すっごく厄介な敵が現れたわ」
　セイバーは攻撃を避け続けてはいるが未だ反撃できず、敵は傷一つ負っていない。このままでは完全にジリ貧だ。だが、どうすればいい。

「私は、アインツベルンのホムンクルス。全身の魔力回路、魔力量は貴方たちとは桁違いに多い。それに、バーサーカーの人間無骨は消費魔力の少ない連発可能な宝具なの。それを、常時開放していても全然問題ないって訳。どうせ貴方たちも、長くは持たないから」
「丁寧な説明どうもありがとう！・・・　アーチャーさえ動ければ、十分に勝機はあるのに」
「勝機？」
　この状況を打破できる策が、遠坂にはあるのか。
「ええ。バーサーカーの攻撃は、かなりの大振り。でも槍のリーチとバーサーカーの身体能力、宝具のおかげで無闇には近づきにくい。決めるなら一撃で決めるのが、１番の安全策。アーチャーがいればアーチャーとセイバーのどっちかで隙を作って、その間に葬る事が出来るはず。でも今は、その囮役ともいえる立場が」
「だったら、俺がやる」
「はぁ！衛宮くん正気⁉サーヴァントは常人の数倍の戦闘能力があるのよ。ましてやバーサーカー相手になんて、一瞬で殺されるわ！」
「でもこのままじゃどっちにしたってセイバーは勝てない！いずれはあの槍に捕らえられる。その前に、倒すしかない。セイバーまで倒れたら、全てが終わる」
「・・・　一撃でも受ければ死ぬのよ。その体でできるの？」

問題ないとうなずく。覚悟は、できてる。死ぬつもりはないが、もし死んでも遠坂を救う事ができるなら。

「一撃分、気をそらせばいけるはずよ。その間にセイバーが仕留めてくれるはず。私も出来る限り援護するわ。サーヴァント相手にどこまで通じるか分からないけど」

手ごろな武器を探し、バーサーカーの攻撃で壊れた柵の一部をとる。長さは少しもの足りないが、強化して武器にする。このところ、長年成功しなかった強化がここの所連続で成功している。この状況下で、成長できたと言う事だろうか。

準備ができ、遠坂の合図を待つ。遠坂が攻撃した所に突っ込んで、俺への一撃を誘導する。イリヤスフィールは俺らを止めようとはせず、逆に何をするのかを待っているかの様だった。

致命的な隙

十字槍が空を裂く。突き、なぎ払い、次々と繰り出されるバーサーカーの攻撃を、セイバーはスルリと絹の様に滑らかに避ける。だが反撃に転じる事が中々出来なかった。

「ちょこまか動いてんじゃねえよ！」

バーサーカーは怒りに任せ、さらに攻撃の手を激しくしていく。やがてその刃がセイバーを捉えるのは明白だった。

（くっ、私が倒れればシロウが・・・。しかし、無茶は出来ない。が、このままでは・・・）

防御不能の宝具。その厄介さに舌打ちをするセイバー。だがこの現状をなんとかしようと、彼女のマスターが奮闘している事を、彼女はまだ知らなかった。

×

遠坂が、視線を送ってくる。

（準備はいい？衛宮くん）

俺はコクリと頷き、突進の構えをとる。バーサーカーの気を引ければ十分だが、一撃加えれるなら加えてやる。死への恐怖はある。体の震えも止まらず、本能があの敵には敵わないと告げている。だが、ここで引いて何になる。これから俺は、聖杯戦争を勝ち

抜いて行かなくてはならないんだ。こんな事も乗り越えられない様じゃ、勝利は掴めない。覚悟を、決めろ！

正面を見据え、合図を待つ。緊張で汗が溢れるし喉も乾いてきた。もう待つ事が出来ないと早まる体を必死に抑える。

そしてバーサーカーが、大振りの横なぎを振り始めた時、遠坂の手から魔力の塊が放出される。それと同時に、俺も突っ込んだ。

怯むな。怯むな。怯むな！

「うおおおおおおおおお！」

バーサーカーの注意を引くため、大声を上げて突撃する。これが今できる精一杯だ。セイバー！

だが、バーサーカーはこちらを見向きもしなかった。遠坂の放った弾は、バーサーカーの首にかけられていたネックレスによって相殺された。こっちを身もしないなら、その頭に渾身の一撃を喰らわせてやる！

大きく振った一撃は、バーサーカーの後頭部を直撃する。これが常人の相手なら、明らかに殺せる様な勢いで振り下ろした。だがバーサーカーは、ひるみもしなかった。それどころか、

「なっ、シロウ!?」

逆にセイバーが、突然戦いに現れた俺に気づき、隙を見せてしまった。さっきまでバーサーカーの攻撃を避け続けていた彼女には、俺がその間合いに入ることがどれだけ危険かを悟り、俺を護ろうと判断してしまった。そして、次のバーサーカーの一撃を避けきれなかった。

「セイバー!!」

セイバーの脇腹に、バーサーカーの槍が刺さる。苦悶の表情を浮かべ、膝をつくセイバー。そうしてようやく、バーサーカーはこちらを振り向いた。

「イッテェなテメェ！姫さま！コイツァ殺しちまっていいのかぁ？」

バーサーカーの頭部からは、だらだらと血が流れている。俺の一撃が通じなかった訳じゃない。こいつが、痛みを気にしない程にイカれてたのか！それ程までに、セイバーしか見ていなかった。

バーサーカーが問いかけた相手、マスターであるイリヤスフィールはクスクスと笑っていた。

「おっかしいな、お兄ちゃん。まさかサーヴァント相手になんて殴りかかるなんて。でも、相手が悪かったわね。バーサーカーは、そんな事じゃびくともしないよ」

少女は楽しそうに語る。俺たちの行動を、可笑しな喜劇でも見ていたかの様に。

「いいわよ、バーサーカー。全員の首を撥ねちゃいなさい！」

「打ち首か！分かったぜ。それが姫さまの望みならなぁ！」
バーサーカーは、こちらに向き直り槍を構える。
「クッ、逃げてくれ！シロウ！」
セイバーはまだ動けない。白い軍服を赤く染め、どくどくと血を流しており、傷の深さを物語る。
なら、俺が戦うしかない。武器を構え直してバーサーカーと向き合う。改めて正面から向かい合うと、やはり俺に勝ち目がない事は実感できた。特にこいつからは、やばい感じしかしない。まさに理性がないって感じの目をしている。
「逃げろ！遠坂！」
「衛宮くん!?どうするつもりなのよ!?」
「俺が時間を稼ぐから、その隙に逃げろ！早く！」
「そんなの無理よ！一瞬で殺されるわ！貴方こそ早く逃げなさい！」
こんな時に言い争ってる場合か、遠坂。だがもうその事を伝える事はままならない。バーサーカーが槍を振る。俺には、その一撃を避ける事が出来なかった。俺の首めがけて横なぎに振られる死神の鎌。瞬きもしないうちに、俺の首と胴は離れるだろう。そう思考したとき、
「うぅおおおおらあああああ!!!」

飛んできた巨大なチャクラムが、バーサーカーに直撃した。この武器は、

「アーチャー!?」

その場にいた全員が驚く。明らかに動けない様な手傷を負ったアーチャーが、そこには立っていた。息は上がり、汗まみれの彼の体には、大きく切り裂かれた傷がありそこから血が止めどなく流れている。消滅しない為に霊体化したアーチャーが、このピンチに一撃を加えたのだ。

吹き飛んでいくバーサーカー。その一撃を放ち、アーチャーも地に付した。遠坂がアーチャーに近づき、何かを呟くと、アーチャーは光と共に何処かへと消えた。

「遠坂!アーチャーは?」

「令呪を使って家に送り返した。あんな傷で無茶するなんて!でも、ほんとに助かったわ」

だが、これで終わりではなかった。吹き飛ばされたバーサーカーは起き上がり、再びこちらへ向かってくる。弱ったアーチャーの一撃では、倒し切る事は出来なかったのだ。しかしバーサーカーは身体中から血を流し、足元もふらついている。何故か顔だけは、未だに余裕があるかの様だったが。

「イリヤスフィール!バーサーカーは既に満身創痍よ!今の状態なら、セイバーと戦っても勝てるかどうか分からないわよ!ここで消耗するのは貴方にとっても得策じゃな

いでしょう。ここで引くなら、私たちは追わないわ」
遠坂がイリヤスフィールに提案を持ちかける。確かにこの状況、お互い戦いを続けるのは得策ではない。
「あら凛、そう思うかしら？既に宝具まで晒しちゃったここで引くのは、私にとって不利なのだけれど」
「負けたら元も子もないわよ。貴方のサーヴァント、もうフラフラだけど？」
「勝手に決めつけてんじゃねぇぞテメェ！」
「やめなさいバーサーカー。今日はもう引くわよ」
「まじかよ姫さま！まだあいつらの首を撥ねてねーぞ！」
「いいから、命令よバーサーカー。・・・　じゃあねお兄ちゃん。また殺しにくるね」
物騒な去り文句を残して、少女は夜の闇へと消えていった。

協力関係

「大丈夫か!・セイバー!」
　バーサーカーが引いていった後、セイバーに駆け寄る。セイバーは自らの血で、白い軍服を染めている。
「大丈夫だシロウ。とりあえずは、だが」
「セイバーの傷は深いけど、致命傷ではないわ。それよりも、私のアーチャーの方が危ないの。急いでついてきて、衛宮くん」
　遠坂もセイバーの脇に立ち、傷を見ながら告げた。
「ついていくって、どこへ?」
「どこって私の家に決まってるじゃない。アーチャーはそこにいるんだから」
「遠坂の家に?・でもなんで俺まで」
　そこが疑問だった。俺がマスターとして戦うと言った以上、俺と遠坂は敵同士なのだ。遠坂もそれは分かっているはずだが・・・。
「セイバーの傷の手当てをしてあげるわ。衛宮君には借りができちゃったし、衛宮くんに話もあるから」

「話？」
「今は説明してる暇はないわ。急がないとアーチャーが死んじゃうわ」
とにかく、今はついて行くしかなさそうだ。走る遠坂の背を追い、再び遠坂の家へと向かい始めた。
×
遠坂の家に着いてから、遠坂は俺たちを居間に残してアーチャーが居るという部屋に篭ってしまった。治療が順調なのか知る術が無い俺は、居間でソワソワと遠坂を待ち続けた。
するとセイバーが、念話を使って俺に話しかけてきた。
「どうしたんだ、セイバー？」
（さっきの戦闘の事だ、シロウ。すまなかった。私がバーサーカーに手こずる余り、シロウに危険なことをさせてしまった）
さっきの・・・ 俺がバーサーカーに突っ込んでいった事か。でもあれは・・・
「セイバーが謝る事じゃ無い。逆に俺が余計なことをしたせいで、セイバーに傷を負わせちまった」
（私が傷を負うのは構わない。だがシロウ、もうあんな無茶な真似はしないでくれ。貴方はマスターなのだから、自分から危険を冒す必要などない）

俺に反論の余地はなかった。このセイバーの負傷の原因が俺にある以上、今後も考えなしの行動はできない。

「悪かった、セイバー。でも、俺だってセイバーに傷ついて欲しくない」

（それは何故だ？マスターが自分の命を顧みずにサーヴァントを助けるなど、本末転倒ではないか）

「でもセイバーは女性じゃないか！いや、そんなの関係なく誰かが傷つくのなんて見たくないだけだ」

（私が女だからだと!?冗談じゃない。貴方がどう思おうが、私にとって重要な事は貴方を守る事だ）

お互いの口調は激しくなってくる。どちらもが、自身の意志を貫こうとする余り、話は行き違う。だが、次のセイバーの一言は、あまりに悲しみがこもっており、俺は自分が何を言おうとしていたかを忘れてしまった。

「私はこれ以上、護るべきものを理不尽に奪われたくはない・・・」

霊体化していたため、その表情は分からなかったが、その言葉には後悔と悲しみが詰まっていた。セイバーは過去に一度、護るべきものを失っているのだ。

俺とセイバーの話は、遠坂が勢いよく部屋から出てきた事で終わった。部屋を出た遠坂は、近場のソファーにドカリと腰を下ろす。

「アーチャーは？」
「とりあえず、山場は凌いだわ。酷い傷だったけど、何とか耐えてくれたわ。でもそのおかげで、ストックしてた宝石をかなり使っちゃった。次はセイバーね。セイバー、実体化してくれる？」
　遠坂の前に現れたセイバーは、傷口を押さえている。遠坂はスッと立ち上がると、いくつかの言葉を紡いでいく。最後に魔力を放出すると、セイバーの傷口へ集約して行く。
「ふー、今の状態じゃ、傷口を塞ぐのがやっとね。無理するとすぐ開いちゃうから」
「なあ遠坂、どうしてセイバーの傷まで治してくれたんだ？」
「だから言ったでしょ、借りよ借り。セイバーが割って入らなければ、アーチャーは討たれて私も殺されてたわ」
「借りって言うなら、俺は遠坂に何度も助けられてるぞ」
「それは衛宮くんがマスターとして戦う前でしょ。それはノーカンで考えてるわ。だって衛宮くんは、バーサーカーに私を討たせるって言う選択をしなかったんだもの」
　そんな事しないとは思うけどね、と言う遠坂。本当に遠坂はいい奴だな。
　だが、ホッとしたのも束の間、俺はある事に気がついた。それは、
（俺って今、遠坂の家にいるのか！それもこんな遅くに！）

唐突に、意識してしまった。急に周りをキョロキョロとしだして、遠坂も頭の上に疑問符を浮かべている。
「どうしたの衛宮くん」
「なっ何でもない。そうだ話ってのはなんだよ」
キョドリながらも思い出した単語を発する。
「そうね。その話をしましょうか。今日の昼に調査してたんだけど、どうやら協力関係を結んでいるマスター達がいるの。それが誰なのかはまだ分からないけど…」
「協力？でも聖杯戦争は最後の1組まで続くんじゃ…」
「そうよ。でも、協力をするのは禁止されていない。それで話ってのはね、私と衛宮くんも協力関係を築かないかって話」
「俺と遠坂で…？」
「ええ、本当はこんなつもりじゃなかったんだけど…　お互いサーヴァントが負傷しているじゃない？この状況で2対1だと勝ち目がない。だからお互いのサーヴァントが完治するまで、協力しましょうって話。いやなら、断ってくれて構わないわ」
「まさか。できるなら遠坂とは戦いたくなかったし、俺は聖杯戦争で戦って行く知識がほとんどない。断る理由はないな」
チラリと、未だ実体化していたセイバーの方を見ると、小さくコクリと頷いた。これ

で完全に決まりだな。
「よろしく、衛宮くん」
「ああ、よろしくな、遠坂」
お互いの手を握る。聖杯戦争初日の夜は遂に終わり、朝日が、街を薄暗く照らし始めようとしていた。

戦いの指標

熱い。

周りが、火に包まれている。ああ、またこの記憶か。

熱い。

最近は何度この夢を見るのだろう。まるであの時を再体験しているかのようにリアルな夢は、周りの熱で肌が焼け、吸う息で喉を焦がすようだ。

熱い。

いつもこの夢を見る時は、目覚めが近いのだ。早く目が覚めて欲しいと願うが、今日はいつもと何かが違う様な気がする。その違和感を確かめる為に、僅かな道を進んでいく。

しばらく進んだ先の終着点は、瓦礫の積もった小さな丘。足場の悪い丘を登り切ると、眼前には巨大な孔があり、そこから流れ落ちる泥は、周りのものを焼き尽くす。

その孔に向かって、見知った背中が進んでいる。あのくたびれたコートを羽織って出て行く姿を、何度見送った事だろう。

「切嗣！」

声は、届かない。切嗣は流れ出る泥へ向かって止まる事なく進んでいく。その後ろ姿を追いかけた。

「待ってくれ切嗣！聞きたいことがあるんだ！」

だが追いつけない。その差は縮まらず、なおも広がって行く。切嗣は止まることなく、振り返る事なく、孔へと向かっていく。

「俺は一体、どうすればいいんだ！教えてくれ！切嗣！」

泥に耐えきれず、体は炎上する。炭になり崩れ落ちそうになる体。心までも焼き尽くしそうな熱は、前を遮った彼女によって止められた。

俺を守るその背中は、さっきまでの悪夢を、忘れさせてくれた。

×

「ん…？」

目を開けると、いつもの天井が広がっている。いつの間に眠っていたのか思い出すことも出来ないまま、寝ぼけた体を起こし、

「!?いっ…」

体に走った痛みで、完全に目が覚めた。

そうだ。遠坂と協力関係を結んだ後、泊まるのは俺の気が気でなかったから、家まで戻ってきたんだ。そのままセイバーに勧められて部屋まで戻って寝たんだったか？

　思えば昨日は、色んな事が起きすぎた。でも、夢ではない。体の痛みが、残酷に真実を訴えかける。
「１０時か…　学校…　って今日は日曜だったな」
　取り敢えずは、起きて飯でも済まそう。痛む体を無理やり動かして、台所へ向かう。
　そういえばセイバーは何処にいるんだ？霊体化しているから何処にいるのかわかりづらいな。
「おーい、セイバー」
　屋敷全体に届くよう大きく声を響かせる。するとセイバーは、すぐに俺の前に実体化してくれた。
「どうかしたのか、シロウ？」
「いや、別段用があったわけじゃないけど…　傷の方はどうだ？セイバー」
「問題はない。リンの治療のおかげだな。それよりもシロウの方はどうだ？昨晩の傷は…」
「取り敢えずは大丈夫だ。まだ痛むけど、動くのには問題ない筈だ」
　それは良かったと、胸を撫で下ろすセイバー。
「ところでなんだが…　セイバーって苦手なものとかってあるか？」
「は？」

×

軽く食事を済ませてセイバーと向かい合う。サーヴァントに食事は必要ないと言われたが、セイバーが側にいるのに俺だけが食べると言うのも気まずかったので、二人分の食事を用意したら渋々席についてくれた。セイバーは元々王妃様だった訳で、舌に合うか心配だったが、反応を見る限り悪くはなかったのだろう。不満そうに席に着いたが、食後は実に幸せそうな顔をしておられた。

「それでシロウ。今後、聖杯戦争を戦っていくとして、方針は決まっているのか？」

そして現在、食事を終えた俺たちは、今後の方針についての話をしていた。

「今のところは、あまり…。だが、遠坂が言うには、聖杯戦争においてマスターの動きが活発になるのは夜になってから、だそうだ。だから、俺たちもそれに合わせて、動くなら夜だと思う」

「あまり勧めたくはないが… 我々には情報もない。闇雲に動くのもどうかと思うが、このまま待っていても結局は後手に回るハメになるな」

「それで、だ。俺としては今夜からでも動きたい」

「ダメだな。私は反対だ」

即答だった。まさに光の速度とも言うべき速さで提案は却下された。

「なんでさ。こうしてる間にも、他のマスター達は自分が勝ち残る為の準備をしている

かもしれないんだぞ。事が起こってからじゃ遅いんだ。だから俺たちだって一刻も早く…」
「シロウ。急ぐ事と焦る事は違う。貴方のは、明らかに後者だ。今の私たちの状況を考えて見てくれ」
　確かに、俺もセイバーも怪我を負っている。だが、
「俺だって何も見つけ次第戦おうって訳じゃない。あくまで最悪の事態に備えるだけのつもりだ」
「それでも危険が大きすぎる。もし戦闘になった際、シロウを守り切れるか分からない。何より、リンの話を忘れたのか？共闘しているマスターに対抗する為に、リンと協力しているのだろう。もし今2対1にでもなったら、確実に私は負ける」
　セイバーはあくまでも確実な手段を取っていきたいのだろう。生前指揮官だっただけあって、リターンよりもリスクを重視しているようだ。
「それに、あまり私を頼られても困る…」
「何言ってんだ、セイバー？」
　セイバーを頼りにしなかったら、じゃあ俺は誰を頼ればいいのさ。サーヴァントに対抗できるのはサーヴァントだけってのは、昨日だけで嫌と言うほど経験した。
「この際だから言っておく。あまり、私を頼りすぎないでほしい。私は、いずれ何処かで

致命的なミスをするかも知れない」
「?·なんでさ?·」
「そ、それは私が‥‥」
RRRRRRRRR
遮るように電話のベルが鳴った。こんな時に誰だ?·もしかしたら藤ねえが、「弁当忘れたから届けてくれ~」なんて言うんじゃなかろうか。
「はい、衛宮ですけど」
『衛宮くん!·すぐにうちに来て!·敵に襲われてる!』

略奪の合図

「こんな事勝手にしていいのか、相棒?」
「うるさい!サーヴァントが僕に指図するんじゃない」
　住宅街を歩く学生服を着た、癖っ毛の少年。その側にいるのは、蓄えた白い髭がツンと立つ、船長風の格好をした壮年の男性だった。
「前にも言ったがよ、俺はライダーなんだぜ。あんま戦いは向いてねぇからよ、過度な期待はされても困るぜ」
「大丈夫さ。爺さんの話じゃ、あいつのサーヴァントは今手酷い傷を負ってるらしいからさ。簡単に倒せるじゃないか」
　嬉々として語る間桐慎二の足取りは軽い。彼が自身の勝利に、一切の疑いを抱いていない証明だった。やがて二人は、目的地である冬木の管理者の邸宅、遠坂凛とアーチャーの拠点へと辿り着く。
「あんま、敵の本拠地に直接乗り込むのは感心しねぇなあ。あの爺さんも、まだ手を出す必要はないとか言ってなかったか?」
「爺さんが臆病過ぎるだけさ。弱ってるうちに倒した方が楽じゃないか。うかうかして

たら、遠坂を誰かに取られちまう」
「ま、俺も誰かに先を越されるのは好きじゃねえ。俺の儲けが減っちまうからな」
ライダーは手を振り上げる。目標は、眼前にある敵の根城。そこへ目掛けて、船長からの一斉射撃の合図が下される。
「さあ！聖女マリアよ、糞を垂れろ！」
×
「はぁはぁ…」
「まさかリンの屋敷が襲われるとは…　アーチャーの負傷を知られていたのか」
遠坂からの電話を受けて、セイバーと共に家を飛び出した。今の遠坂達は満足に戦える状況じゃない。俺たちが着くまで持ち堪えてくれ…　！
息が苦しい。既に１０分以上止まることなく全力で走り続け、傷ついた体は走る衝撃で痛みさらに体力を削っていく。
だが、遠坂の家がある方面から上がる煙を見て、そんなことはどうでも良くなった。たとえ肺が破れようが、速度を緩める事はない。とにかく早く、遠坂の元へ！
「ぜぇ…　はっぁ！」
目的地が目前に迫った所で、思わぬ障害とぶつかった。遠坂の家は轟々と燃え盛り、その周りに野次馬が集まっていたのだ。

「くっ…　邪魔だ…。セイバー！」
「わかっている！」
　セイバーを先行させる。俺は人混みを掻き分けながら、野次馬達の最前列へと何とか這い出る。
「あ…」
　視界に入るのは盛んに蠢く炎だけ。もはや鎮火するのは不可能な程火は回り、屋敷は音を立てて崩れていく。昨日立ち寄った部屋も、見渡した居間も、遠坂の家も、もう無い。
「待て坊主！危ないぞ！」
　制止を振り切って駆け出す。とにかく遠坂を助けなければ。それも出来なければ、俺は遠坂に一体何を返せたっていうんだ。
「こんな様で…　何が正義の味方だ…」
　開きっぱなしの門を通る。遠坂の事だ。きっと脱出している筈だ。だから敵を退ければ何とかなる。それが最善の展開だ、と最悪のイメージを考えたくはない一心でそうだと思い込む。
　結果として、不幸中の幸いか遠坂は既に屋敷を離れ、逃げ延びていた。だが俺は未だその事を知らず、そして信じられない人物と遭遇した。

「ハハハハッ！言い気味だよ、遠坂。僕に素直にならないから、こんな事になるのさ」
「ハッハァ！いいねぇ、やっぱ戦いってのはこうじゃなくちゃよ。一方的に奪い、犯し、殺す。これぞ醍醐味ってもんだぜぇ。良く覚えときな、相棒！勝者の特権ってもんをよぉ！」
燃え盛る屋敷を見ながら、笑う少年。その脇に立ち、不気味な微笑を浮かべる、恐らくはサーヴァントとおぼしき男。
「慎…　二？」
そこにいたのは、中学からの友人であり、たった今魔術師であるということがわかった、間桐慎二であった。

燃え尽きた友情

「慎…　二？」

とても、信じられなかった。慎二とは短い付き合いではない。それでも今の今まで、慎二が魔術師であるなどという事は知らなかった。そしてマスターとして聖杯戦争に参加し、更にはそれを理由にこんな事をするなんて、思ってもいなかった。

思わず漏れた声は、ようやく絞りでた水滴の様に小さく、燃え盛る炎の音に掻き消された。だが、慎二はその声に気づき、俺と同じような信じられないと言った様な表情でこちらに振り向いた。

「衛…　宮？」

お互いに、予期せぬ人物との遭遇。その驚きは動く事を、話す事を辞めて、ただ視線を合わせる事しか出来なかった。その沈黙を破ったのは、事情を知らない、お互いのサーヴァントだった。

「おいおい、誰だこいつは？」

慎二のサーヴァントが、こちらに銃を向ける。それを合図に、慎二に対して行われた狙撃は、たまたま慎二のサーヴァントが振り上げたサーベルとぶつかり、阻止された。

「なっ!?」

その場にいた全員が驚きの声を上げ、

「やめろ!・セイバー!」

俺の制止の言葉に全員が、困惑の顔をした。セイバーからすればなぜ止めるのか分からない。それは相手も同様である。

「ほぉ、お前さんがセイバーのマスターか。にしても、運が良かったなぁ相棒。危うく、いきなり死んじまう所だったぜぇ」

「黙ってろ、ライダー」

慎二には、ライダーの軽口に付き合う余裕も無かったのか、俺を睨みつけながら殺気の篭った声でライダーに命令する。ライダーはしかめっ面になりながらも黙り込んだ。慎二はギリッと歯軋りを立てた後、ようやく何時もの調子で話し始めた。

「誰かと思えば衛宮じゃないか。まさかお前もマスターだなんて驚いたよ。でも残念だね、僕と戦う羽目になるなんてさ」

余裕があるように見せているが、慎二にはまだ動揺が残っている。どうやら俺が魔術師であった、という事にまだ驚いている様だ。・・・・ そういえば遠坂も、最初はこんな感じだったっけ。でも慎二には、遠坂とは違い俺に対する憎しみと言うか、嫉妬と言うか、刺々しい何かを感じる。

「慎二。これをやったのはお前か」
　だが、今はもうそんな事どうでもよかった。俺の中にある、魔術師としての意識を最大限引き出す。今この時に、俺という私情は邪魔だ。慎二が、ではなく目の前のマスターが一体どんな思惑なのか。
「ハッ、当然だろ。この状況を見れば馬鹿でも分かるよ。でも衛宮は、無意味なことが大好きな馬鹿だからね。僕が一から説明して…」
　思考を、ガチリと切り替える。今の言葉でハッキリしたのは、慎二は、敵だ。
「何でこんな事をした。答えろ！慎二！」
　張り上げた声に、慎二は怯む様に震えた。
「そ、そんなのマスター何だから当然だろ…　それよりも、何だよ。今の態度。こっちが下手に出れば良い気になりやがってさ。僕と衛宮の仲だから、この場は免じてやろうとか、なんなら僕の仲間にしてやってもいいとか思ってたけど、今の、気に食わないね」
　空気が変わる。お互いのサーヴァントは、いつでも動けるように身構える。俺も、すぐ脇にある木片に目をつける。多少短いが、臨時でなら十分。急いで出てきたせいで、武器を持ってくるのを忘れたが、何とかはなるはずだ。
「だいたいね、お前が僕と同じ魔術師で、更にはマスターだって事も納得できない。魔術師にだって血統があってさ、衛宮みたいな素人が、サーヴァントに恵まれただけで勝て

るなんて思われたら、不愉快を通り越して殺意まで湧くね。何たって遠坂も、こんな奴をパートナーにしたのか、検討も付かないね」

遠坂邸を焼く炎は、今の状況を反映するかの様に激しく燃え盛っていく。俺と慎二とを囲う炎は、既に手遅れなほど回りきっていた。

「・・・ 一つ言っておくぞ、慎二。お前に、遠坂は釣り合わない」

そして、最後の決定打。爆弾を起爆させたのは、俺の一言だった。

「黙れぇ!どいつもこいつも、僕を見下しやがってさ!・・・ もういい。死んじゃえよ、お前」

炎の試練

ガキンッ、と金属と金属がぶつかり合い、耳障りで甲高い音が火花と共に散る。一合、二合、三合…　剣戟は留まることなく、炎の音に負けじと響き渡る。

狙撃に失敗したセイバーは、もはや姿を隠す必要なしと、木陰から飛び出してライダーに斬り掛かった。それは俺が、ライダーにいつ撃ち殺されてもおかしくない状況を、打破する為でもあったのだろう。結局俺はまた、セイバーに迷惑をかけてしまっている。

だが今回は、前回の様な失態を犯す気はない。魔術師として未熟な俺が、サーヴァントと戦っても邪魔なだけだ。何より、セイバーは、ライダーを圧倒している。流石にセイバー、剣の英雄のクラスだけあり、その剣技は目に見えて卓越している。ライダーはギリギリでセイバーの攻撃を受けきっているが、その実力差は明白だった。俺が介入する必要など初めから皆無。なら俺がするべき事は…

「慎二ぃ！」

慎二を倒す事、ないしは足止めする事。俺が慎二を倒せればそれでも良し、セイバーがライダーを討つまで足止めするも良し。手近にあった木片を拾い、すぐさま魔力を通

していく。

「全工程完了・・・」

ランサーに襲われて以来、強化の成功率はこの上なく高い。土壇場で出来る様になるとは、漫画の様に現実感が無いが、ここで失敗して死にましたなんて笑い話にもならない。

「お前の相手は俺だ！慎二！」

慎二は、何やら本を片手にセイバーとライダーの戦いに介入しようとしていた。それを阻止する様に、声を張り上げて突進する。慎二はビクリと体を震わせて、慌ててこちらを向いた。

「なっ・・・。っ衛宮ぁ！」

慎二の足元から、膨らんだ影が勢いよく打ち出される。地面を裂きながら進む影を、強化した木片で弾く。威力自体は、大した事はない。速度はあるが、反応出来ない程じゃない。思考をクリーンにしたまま、さらに距離を詰める。

「ひっ、来るな！来るなぁぁぁ！」

慎二は次々と影を打ち出す。が、単調に打ち出すだけのそれは、もはや脅威にはなり得ない。馬鹿の一つ覚えの様に打ち出される影を、避け、弾き、距離を詰める。

そして最後の一撃、距離を詰めたせいで僅かに反応が遅れる。

「グッ！」
　避けきれなかった影は、俺の体を掠めていく。この程度、何の問題もない。俺は慎二に肉薄し、そして…
　慎二の頬に、拳をお見舞いする。さっきまでの勢いをそのままに殴りつけた一撃は、慎二を吹き飛ばして地面へと背をつけさせる。
「痛ぅ…」
　体を起こした慎二を見下ろす。
「終わりだ、慎二」
　慎二はすぐさま脇に目をやり、その視線の先に傷を負い膝を付くライダーを見た。
「ははっ…僕が、負けた…？ っふざけるなよ！ライダァ！大口叩いといて何をやってるんだよ！今すぐ立って衛宮を殺せ！マスターの言うことが聞けないのか！」
　慎二は激昂し、自らのサーヴァントに怒りをぶつける。それは不可能だ。ライダーではセイバーには勝てないし、あの傷ではできても逃げることが精一杯。それも、セイバーの追撃があれば潰える。そんな状況にあっても、慎二は自分の負けを認めようとはしなかった。
「今すぐ令呪を捨てて、この戦いを降りろ、慎二。もししないって言うんなら…」
　手に握られた武器を強く握る。この戦いに参加すると決めた以上、こうすることは必

然にも等しい。俺が正義の味方を目指すならば、なおのこと。それが例え、親しい友人であったとしても。

「ひっ…」

慎二は怯えながもなお、俺の事を睨み返した。

「慎二…」

――――――やめてくれ。武器を大きく振りかぶる。――――――こんなことはしたくない。武器を持つ手が震えた。俺は――――――

「シロウ！危ない！」

セイバーが、俺を突き飛ばした。直後、俺が立っていた部分を何かが通りすぎ、地面へと深く突き刺さった。黒く塗られ闇に溶ける暗器が、炎に彩られる。

「何をやっておるか、慎二よ。安易に動くなと伝えたはずだが」

そして、声が響いた。乾き老いた、一声で老人のそれと分かる。声は木霊し、どこから発せられているのかは分からない。だがこれは…

「お、お爺さま…？」

「仕方のない孫だ。儂が加勢する故、早う退け」

マスターに違いない。だとすると今の攻撃はサーヴァントによるものか。

「気をつけろ、シロウ。どこにいるのか気配が全く掴めない」

炎が辺りを照らしていても、その存在はどこにいるのか視認できなかった。だが、ランサーに襲われたあの時と同じ、刃が喉元に押し付けられているかのような、死の気配に体が震える。
「間違いなく、アサシンのサーヴァント。シロウ、私のそばから離れるな」
「っ！待て！慎二！」
その隙に、慎二は逃げ去った。ライダーの姿も既にない。あの慎二がすぐさま言いつけを守るほど、この老人を恐れているということか。
「行ったか…。全く馬鹿な孫じゃな」
「何者だ、お前は」
「ふむ。セイバーのマスターよ。儂は間桐臓見。既に隠居した間桐の魔術師と言っておこうか」
間桐臓見。慎二から聞いたことすら無い名前だ。分かるのは、間桐臓見はマスターの一人であり、この闇に潜むサーヴァントを従えているということ。そして、敵であるということ。
「お前もマスターか。慎二の爺さんってことは、慎二と組んでるってことか」
セイバーと背を合わせ、いつ攻撃が来てもいいように全方向に集中を向ける。
「なに、今日は戦いに来たわけではない。孫がここで敗れては困る故に、助けに来ただけ

じゃ。お主が儂を追わぬなら、このまま締めとなるじゃろう。まあお主が遠坂の娘が心配でないというなら別じゃがの」
「遠坂は無事なのか」
「うむ、慎二はどうやら取り逃がしたらしい。全く、つくづく役に立たん。やるなら最後まで済ませて欲しいものじゃの」
ギリっと歯ぎしりをしながら虚空を睨みつける。だが、できることはなかった。今は何よりも、遠坂の安否が気になった。殺気が薄れる。張りつめた空気は萎み、炎の熱さを思い出した。
「シロウ。とにかくここを離れよう。いつ崩れてもおかしくない」
「……ああ」
敵は引いた。だが、俺には何ができた。崩れ落ちる屋敷を見つめながら、自分の無力さを悔いた。

×

戦いの後、一度家に戻ることにした。俺は遠坂を探そうとしたが、闇雲に探すよりはまず、一度戻り連絡がないかを確認するべきだとセイバーに言われたからだ。遠坂が無事ならば、何かしらのアプローチがあるはずだと。
そうして、家に戻る。足取りは重かった。戦いの重圧と、自身の不甲斐なさ。敵を退

けたとはいえ、勝利には程遠い結末だった。結局は、慎二も取り逃がしてしまっている。大口を叩いた自分は、結局は何ができるのだろうか。

昨日よりも長い帰路に思えた。家につき、

「誰かいる…！」

違和感を覚えた。桜や、藤ねえではない。魔術師だ。セイバーも、サーヴァントの気配を感じ取っている。

ごくりと、生唾を飲む。侵入されている以上、敵が先手を取れるはずだ。慎重に扉を開ける。玄関に敵の姿はなかった。

慎重に廊下を進む。セイバーは既に抜剣し、臨戦態勢をとり後ろにいる。ここで戦うことを避けることはできない。

いる。障子の向こうに人の気配を感じる。隠れもせずに堂々と。セイバーに合図し、一気に部屋に入り、

「あら、衛宮君。帰ってきたのね」

何故か、遠坂がいた。

思わぬ再開

「あら衛宮君、帰ってきたのね」
「……は？」
　唖然と、突っ立っていた。状況が理解できない。
「ちょ…ちょっと待て！なんで遠坂が家にいるんだ！」
「あら、言ってなかったかしら。避難よ避難」
「避難って…っまぁ遠坂が無事なら、それで良かった」
　とにかくホッとした。見たところ怪我なんかもしてないようだし、心配することはなさそうだ。ただ…
「遠坂…悪い、俺…」
「ううん、衛宮君は何も悪くないわよ。まさか家にまで襲ってくるとは思わなかったけど、みすみす襲撃を許した私の落ち度。それに関してはもう吹っ切ったわ」
　流石は魔術師、と言いたいところだが、その表情は決して明るいものじゃない。当然だ。長年過ごして、家族との思い出もあった筈の家を失ったばかりなのだから。
「問題は拠点を失ったことね。持ち出せたのは最低限だけで、色々と切り捨てる羽目に

なっちゃった。まぁ、一番大事なものを持ち出せただけ良しとするか」
　そう言って遠坂は、小さな宝石を取り出した。見るからに高価な一品と分かるそれには、高濃度の魔力が込められている。
「さて、本題に移りましょうか。私の家まで焼いてくれたんだもの。それに見合った対価を得なくちゃね」
「対価？」
「ええ、情報よ。私の方は特に話せることはないけど…衛宮君は？敵の姿とか、マスターの正体とか、何か情報はあった？」
「あぁ、敵のマスターと戦った」
「はぁ!?」
　単刀直入に結論を述べたら、乗り出さんばかりの勢いで驚かれた。
「戦ったって、はぁ…そんな無鉄砲な…」
「仕方ないだろ、あの時は気が気じゃなくて、急いで助けなきゃって思ってたんだから。っと、話を戻そう。戦ったのは、二人だ」
「二人？つくづく幸運ね…」
「様子を伺って、加勢に来たって感じだった。それで、ここからが問題だ。驚かないで聞いてほしいが、遠坂を襲ったのは、慎二だ」

「慎二って、間桐慎二？妙ね、慎二には、マスターになる素質があるとは思えないけど…」
「知ってたのか？慎二が魔術師なこと」
「それはね。間桐家は、それなりに代を重ねた魔術師の一族なの。慎二がその跡継ぎなことは知ってたけど、魔術師としての素養はなかったはずよ。それがマスターになるなんて」
「じゃあ、間桐臓見は知ってるか？慎二を助けに来たマスターで、慎二の祖父だと言っていた」
「間桐臓見？聞いたことはあるにはあるけど…隠居したってことぐらいしか知らないわ。でも、これで一つ分かったことがあるわ。私、マスター同士で協力し合ってる連中がいるって言ったわよね。恐らく、その二人だと思うわ。慎二に、身内まで裏切ろうなんて度量があるわけないわ。そうなら、臓見はていのいい手駒をもってるってことになる」
　確かに、慎二は臓見に言われてあっさりと引いた。どころか、怯えていた感じもある。身内同士で手を組んでいるってことか。
「ただ…慎二の奴が臓見に言われて無理やり参加させられたって感じじゃなかった」
「そりゃそうでしょ。あの小心者が、脅されて参加したとしても何の役にも立たないもの。どうせ屋敷の奥でうずくまってるだけよ。いい、衛宮君。慎二は、自らの意志で聖

杯戦争に参加した。どうせ命を賭ける覚悟なんてないんだろうけど、敵になったからには手加減なんてしちゃだめよ」

「っ…それは、分かってるけど…」

あの時、もし臓見が助けに入らなければ俺は慎二をどうしていただろうか。俺が聖杯戦争に参加した理由。友人として親しかった慎二。俺の理想――

それらを天秤にかけたとして、どんな判断を下していたのか、今の俺には分からなかった。

「まぁマスターの話はこのくらいにして、サーヴァントについては？真名のヒントとか、見つけた？」

「あっ、ああ」

遠坂に話題を移されて、俺も考える事を辞めた。どうせ、答えが出ることはない。これればかりは。だが、いつまでも迷っているわけにもいかない。いずれまた、突き当たる壁なのだから――

×

「なるほど、慎二のサーヴァントは銃とサーベルを使う、船乗りの様な格好をしていたのね。実力がセイバーより劣るのなら、アーチャーが負ける要素はないはずね」

「むっ、心外だなリン。私がアーチャーと戦って劣ると？」

「さあね～、ただ船乗りのサーヴァントなら、きっとライダーね。それだけでも十分な成果だわ」

サーヴァントの情報を共有するにあたって、俺よりも実際に戦ったセイバーの方が、より詳しく説明できるだろうということで、セイバーに実体化してもらった。

「それで、臓見のサーヴァントはアサシンで確定…と。また厄介そうなマスターとサーヴァントが組んだみたいね」

情報を整理して、今後の方針も決まった。とりあえずは慎二と臓見の二人を倒さなくては。まだ脱落者はゼロ。ランサーのマスターは正体が知れず、キャスターに関しては一切の情報がない。

「しばらくは迂闊に出歩けなくなったわね。アサシンが潜んでいるわけだし、いつ、どこで襲われるか分からないわ」

ああ、と相槌を打ち頷く。ここ二日ばかりで、一体何度命を失いかけたことか。聖杯戦争に参加する以上、覚悟の上ではあるが、覚悟があったとしても死ぬのは怖い。でも、もう遠坂の様な人は生みたくない。慎二が、このままおとなしくしている筈もないだろう。次こそは、慎二を止めなくては。

「さてと、それじゃあ衛宮君、お風呂に入ってくるわね」

「おう、気を付けてな……は？ちょっと待て遠坂何言ってるんだ？」

「何って言ってなかったっけ？私、衛宮君家に泊まることにしたわ」

また――――思考が停止した。

断章　毒虫の根城

月明かりが世界を照らし、世界が静まり帰る時。美しい月光は、世界を白く彩る反面、闇をも濃く映し出す。光の遮られた暗闇は、目を凝らしてなお全容が見えない。出歩く人々は、その闇から逃げる様にせわしなく歩いていく。

ブンと、不快な羽音を立てて虫が飛ぶ。フラフラと蛇行を繰り返しながら、一定の方向へと飛んでいく。食事を求めて、匂いに誘われて。やがて灯りもまばらな、不気味さだけが残る大きな洋館の、その庭で死んでいた鼠へと辿り着いた。既に腐食が始まっているその肉塊に、虫たちが群がり自らの肉としていく。腐臭を放つ肉は小さく、誰も住んでいないかのように手入れの行き届いていない、豪勢であったであろう洋館の、門が開く。誰も見たことのない主の帰りに一人でに開き、一人でに閉まった。杖を突いた小柄な老人が遅い足取りで屋敷へと帰る。

そうして、虫たちは四散した。彼らは、かつて嗅いだこともないような程の濃密な血の匂いに耐えきれず、食事も放置して飛び去っていった。

その匂いの元、間桐臓見は何事なかったように扉を開き、自らの居城である間桐邸へと帰っていった。

間桐邸には、どこか陰鬱とした雰囲気がある。室内の照明は暗く、締め切られた窓によって空気は淀んでいる。だが間桐邸の地下、蟲蔵と呼ばれる地下室と比べれば、楽園ほどの差があるだろう。

間桐慎二は、この蟲蔵が小さい頃から苦手だった。ここにいる蟲を、自身には制御できない。蟲たちがその気になれば、間桐慎二という存在は、骨を残して栄養となるだろう。かつて彼の母がそうなったように。

「慎二よ」

そして、それと同じくらい、自らの祖父、間桐臓見の事も苦手だった。いや、恐怖していた。自身や、父鶴野と違い、間桐がまだ全盛の時の代、すなわち間桐の血を持つ本物の魔術師だったからだ。

「何故、儂の言いつけを破った?」

臓見の言葉には、何の感情も含まれてはいない。慎二には、それが恐ろしかった。それは自身が価値のない人間という証明であり、あくまでも数合わせとして参加させられているという事実を押し付けられる。サーヴァントを与えられた慎二には、到底容認できない事実であった。

「と…遠坂のサーヴァントが弱っていると教えたのは、おじい様だろ?!聖杯戦争が、サーヴァントの潰し合いなら、弱っているうちに叩くのは定石でしょう!」

大声で主張し、意味のない虚勢を張る。ビクビクと怯える様子を隠しきれていないことに、慎二自身は気づいていなかった。呆れた様に溜息をつきながらも、臓見は慎二に説く。

「儂は何も叱っているのではない。お前の言うことも確か」

「なっなら…」

「だが、それと言いつけを破ったことは別じゃ。儂が動くなと命じたのは、確実に勝ちを狙う為。それを遠坂の屋敷まで襲いに行くとは…」

臓見の一挙一動に怯える。

「だが、お前の行動で状況が変化したのも事実。既に起こってしまった事は、どうしようもあるまい。遠坂の娘と衛宮の倅。この二人が協力しあっているとあっては厄介じゃ」

臓見は慎二から視線を逸らし、階段を上がっていく。

「慎二、儂とお主であの二人を確実に仕留める。お主は遠坂の娘を足止めせい。儂が、衛宮の倅とやる」

「なっ…それなら僕に…!」

「異論は、認めんぞ」

じろりと、光の無い漆黒の瞳に睨みつけられ、慎二は後ずさりながら黙った。

「さて…では色々と準備をせねばあかんな。慎二、お主にはあの二人への開戦の合図を

送ってもらおうかの。あの二人をおびき寄せるには、絶好の餌があるでな」

月明かりが雲に紛れると、月下はただ闇だけが覆い、冬木の街には不穏な空気だけが漂う。未だ脱落者なしの聖杯戦争は、この晩より加速していく。

目覚め・遠坂との朝

視界の隅に光を感じる。遠くから小鳥のさえずりが聞こえてくる。浸かっていた水が、段々と抜けて自身の肉体が形成されていくような感覚を覚えて、目が覚めたことに気づいた。

体を起こすと、体の重さを一層感じる。体の節々も痛み、倦怠感があった。外の冷気に晒されて布団が恋しくなるが、時計の針は既に六時を指している。気を張って布団を離れて、朝の支度をすることにした。

「桜は…来てないのか」

普段なら既に、桜が朝食の用意を終わらせている頃だったが、どこにも桜の姿はない。ふと、慎二の事が頭をよぎった。間桐家の二人のマスター、慎二と臓見。つまり桜も、何かしら聖杯戦争に巻き込まれているのではないのかと、不安が募った。

「いや…遠坂が言ってただろ。魔術師は第一子に魔術を継がせて、それ以外の子はその存在すら知らないこともあるって。だから…」

だから大丈夫だと、素直には思えなかった。特に慎二の事だ。桜が、敵である俺の家に来ることを良く思うはずがない。もしかしたら慎二に止めれているのかも知れない。

連絡が無いのも、慎二がそれを許さないからと考えるが、それでも胸中の不安は拭えなかった。

「変に刺激するのもマズいよな…」

だが桜が、この聖杯戦争の期間間桐家にいるとすれば、逆にそれは安全なのではないか、とも思った。いつも我が家に来て、帰る時間も遅い。この時期にそれは危険すぎるのではないか。間桐家は曲がりなりにも正当な魔術師の一族だ。慎二の様な事をする奴はそういないとすれば、暫くの間はその方が安全なのかも知れない。

突然、ガラリと襖の開く音が聞こえて振り返る。そこには、とても眠そうにぼうっと立つ遠坂の姿があった。僅かにはだけているパジャマに、さっと目を逸らす。

「……そうだった。遠坂は今…」

我が家の洋室の一つに住んでいる。いや正確には昨日から住み始めた。「同盟関係が終わるまでだから」と言われ、昨日の出来事もあって強く反対出来なかった。その先送りの結果が、こうして今出ているわけだ。確かに協力し合っているわけだから、同じ場所に住むのは効率がいいし安全だ。だが、俺の気が気じゃないというか落ち着かないというか、朝から悶々としてしまう。

（いやいや…セイバーとだってうまくやってるんだ…霊体だけど）

もしここにセイバーまでいたらと考えて頭を振る。幸いにもセイバーはあまり実体

化を好まない。魔力は温存しておくべきだ、と言う至極真っ当な意見と、セイバーの個人的な理由らしい。あまり詳しくは教えてくれなかったが、セイバーは時折バツが悪そうな顔をする時がある。やたらソワソワしてるというか、キョロキョロと周りを見渡して落ち着きがないというか。何も起きなかった事に胸をホッとさせているとか。

「んん…」

先ほどから一歩も動かず座りこんでいる遠坂のところへ、コーヒーを作って持っていく。

「おはよう遠坂。コーヒーしかなかったけど、いいか？……朝、弱いんだな」

差し出されたコーヒーをチビチビと飲みながら、ようやく口を開ける。

「そうね…昨日は色々と疲れちゃったし、あの後も遅くまで起きてたのよ」

それは知っている。昨日も土蔵での鍛錬を行った。未熟な俺にできる事は、毎日続けていくことだけだ。その時、夜も更けていたというのに遠坂の居る部屋に明かりが付いているのを見た。もしかしたら眠れない程ショックを受けていたのかもと思い、そっとしておいたのだ。俺が行ったところで何かをできるわけじゃないし、遠坂だってそんな弱い所を見せたくはないだろう、と。

「そんな心配しなくても大丈夫よ、衛宮君。別に感傷に浸ってた訳じゃないわ」

「え…？」

何で分かったのか、心配は要らないと穏やかな口調で喋る遠坂に唖然と声を漏らす。
「フフッ衛宮君、思いっきり顔に出てたわよ」
「なっ…」
何だか、自分の考えていたことを全て見透かされて恥ずかしくなってしまった。そんなに分かりやすいだろうか…？とにかく、遠坂が大丈夫そうで安心した。
「ところで遠坂、これからどうするか決めたのか？」
遠坂が起きてきたら、一番聞きたかったことだ。同盟は継続している。協力している間桐家の二人のマスターも判明した。そのクラスにも概ね予想はついた。戦力的に考えても五分くらいはあるだろう。ここまでの準備があるのなら、あとは遠坂と作戦を練るだけだと考えていたが遠坂からは予想とは違う返事が返ってきた。
「何もしないわよ」
ポカンと口を開ける。
「別に、余裕ぶってるわけじゃないわ。今は私たちの方から動くのは利益が少ないってだけ。本調子でもないのに、魔術師の根城に乗り込む危険を冒す必要はないじゃない？」
そうか。セイバーは既に本調子に近いが、アーチャーの傷は深い。今の状況なら五分だろう。だが、アーチャーが完治すれば戦力的に俺たちが有利になる。

「それに、魔術師の邸宅は言ってみれば要塞みたいなものよ。魔術師にとっての家は貴重な霊脈を確保するためでもあるし、魔術刻印には及ばなくとも一族の研究の全てがある。そう易々と踏み入れる場所じゃないのよ」

ふと、桜の事を思い出した。そうだ、間桐邸には桜もいる。俺たちが襲いに行けば桜も巻き込まれるかも知れない。そうなったら、俺はこの聖杯戦争に参加した他のマスターと変わらなくなる。

……つくづく馬鹿だな、俺は。冷静に考える事が出来なかった。そんな言い訳が通用するような世界ではないというのに。

「それで、結局どうするんだ。何もしないなんてことはないだろう?」

「そうね、表立って動くのは危険ね。なら、この屋敷に籠るわ。どうせ連中の方から動きがあるでしょ。こうしてる間にも連中は不利になってくんだから。だから……そうね、衛宮君、私が魔術の稽古をつけてあげるわ」

「本当か!」

願ってもない提案だ。切嗣亡き後、ろくな師もなく鍛錬を続けてきたんだ。はっきり言って俺ができることは半人前の域にも達してないだろう。遠坂が教えてくれるなら、断る理由もない。

「よろしく頼むよ、遠坂」

「ビシバシ行くわよ。こう見えてもスパルタなの、私。衛宮君もそっちの方が得意そうだしね。それじゃあ早速……」
「待て遠坂、今日月曜だぞ」
「学校は休みなさい、とりあえず慎二と臓見を倒すまではね。連中どんな手を使ってくるか分からないんだもの。最悪、学校が戦場になるわよ」
それは、最悪だ。サーヴァントの戦いの規模はこの二日で重々把握した。あんなことが学校で起きたら、どれだけの人間が巻き込まれるか想像も付かない。
さて、とりあえずは欠席の言い訳でも考えるかと思っていたが、更なる大問題が我が家の目の前に迫っていた。
そう、「冬木の虎」こと、藤ねえの襲来である。